

令和6年度 研究報告書

目的で貫く中学校生徒会活動に関する実践的研究  
—生徒が参画する学校づくりに向けて—

指導教員      藤井 美保 准教授  
                 太田 恭司 シニア教授

令和5年度入学  
熊本大学大学院 教育学研究科  
教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース  
231-A9701 小島 孝介

## 報告書要旨

1. 研究の背景と目的	1
1-1 特別活動に求められるものと社会的背景	
1-2 特別活動の現状及び課題	
2. 先行研究の検討	3
2-1 学習指導要領における特別活動の目標の歴史の変遷に関する先行研究	
2-2 生徒会活動の活性化を企図する実践研究	
2-3 研究の方向	
3. 実践研究の対象と方法	6
3-1 研究の対象	
3-1-1 A中学校の生徒会活動の実態	
3-1-2 A中学校の生徒会活動の課題	
3-2 実践の構想と手立て	
3-2-1 目的で貫く生徒会リーダー研修の改善	
3-2-2 目的で貫くための合言葉の設定	
3-2-3 目的で貫くツールの導入	
3-3 検証の手立て	
4. 実践研究の実際	13
4-1 目的で貫く生徒会リーダー研修の改善	
4-2 「成長モデル」を使った年間活動計画の見直し	
4-3 目的で貫くことで現れた新規の活動	
4-3-1 目指す学校の姿・生徒の姿の策定に向けた現状の分析	
4-3-2 全校集会での方針説明と発信活動の開始	
4-3-3 形骸化した挨拶運動の見直し	
4-3-4 対面式での委員会紹介の改善	
4-3-5 体育大会結団式での目的の説明	
4-3-6 体育大会における種目新設と「一委員会一役運動」	
4-3-7 生徒会規約の改廃と生徒議会の復活	
5. 実践研究の成果と考察	26
5-1 社会参画意識の醸成	
5-2 生徒による目的の再生産	
5-3 生徒による自治的な活動の運営を支える	
5-4 教職員への波及効果	
6. まとめ	38
6-1 研究のまとめ	
6-2 今後の展望	

引用・参考文献

謝辞・補足資料

# 目的で貫く中学校生徒会活動に関する実践的研究

—生徒が参画する学校づくりに向けて—

熊本大学大学院教育学研究科  
教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース  
231-A9701 小島 孝介

## 報告書要旨

現行の学習指導要領において特別活動では、社会に参画する態度や自治的能力の育成が重視されている。また、令和5年4月に施行されたこども基本法や令和5年6月に閣議決定された第4期教育振興基本計画では、子供の社会参画を保障する内容が含まれている。

しかし、日本財団が行った18歳意識（第62回調査）では、「自身と社会の関わりについて」の質問項目6つすべてで、参加国中最下位となっており、社会参画意識の低さが際立っている。

これは、学校教育において、社会参画意識の基盤となる自治的な活動の実践が十分ではない状況が要因の一つであると考えられる。

そのため、本研究では、特別活動のうち中学校の生徒会活動に焦点をあて、生徒が主体的に学校づくりに参画する場として生徒会活動を位置づけることで、社会に参画する態度や自治的能力を育成することを目的として実践研究を行った。

手立てとして、生徒会活動を目的で貫くことを軸に、生徒会リーダー研修の見直し、活動の目的に立ち返るキーワードの設定、生徒自身が自治的活動を運営するためのマネジメントツール「成長モデル」による年間活動の見直しを行った。

その結果、目的で貫く生徒会活動を展開したことによって、生徒会執行部の生徒を中心とした主体的な活動が見られるようになった。

一方で、様子の変化は見られるものの、生徒が学校を自らの活動によって変えることができる意識や学校をつくっている意識の醸成は、質問紙調査では見られなかった。

ただし、生徒の主体的な生徒会活動を企図するにあたって、目的で貫く活動は、生徒が自ら活動の目的を再生産することを促す役割や、生徒による自治的な活動の運営を支える役割を持つことが分かった。これは、昨今の生徒会活動が抱える課題である、目的の喪失に伴う生徒の主体性の減退や活動の形骸化、点検・評価活動の自己目的化等への対抗策として有効である。

また、教職員への波及効果として、目的を貫く活動によって生徒は大人（教員）との議論にも十分耐えうるような意見を持ち得ており、教師は生徒を、生徒会活動をともに考える相手として認識するようになる傾向が現れることが分かった。

【キーワード】 特別活動 生徒会活動 成長モデル 社会参画意識 自治的能力

## 1. 研究の背景と目的

### 1-1 特別活動に求められるものと社会的背景

現行の学習指導要領において特別活動では、「2 特別活動改訂の趣旨及び要点 (1) 改訂の趣旨 ②改訂の基本的な方向性」において、「内容については、様々な集団での活動を通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力を重視するため、学校や学級の課題を見だし、よりよく解決するため、話し合っ合意形成し実践することや、主体的に組織をつくり、役割分担して協力し合うことの重要性を明確化する」と述べられており、社会に参画する態度や自治的能力の育成が重視されている。

また、令和5年4月に施行されたこども基本法第3条においては「3 全てのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、自己に直接関係する全ての事項に関して意見を表明する機会及び多様な社会的活動に参画する機会が確保されること」、「4 全てのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、その意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されること」と述べられている。また、令和5年6月に閣議決定された第4期教育振興基本計画でも、「教育振興基本計画の策定・フォローアップにおいて、子供を含む各ステークホルダーからの意見聴取・対話を行い、計画への反映を行う」とされている。いずれにも、子供の社会参画や意見表明を保障する内容が含まれており、制度整備が進んできている。

しかし、日本財団が行った18歳意識(第62回調査)では、「自身と社会の関わりについて」の質問項目6つすべてで、参加国(6カ国)中最下位となっている。特に、「国や社会に役立つことをしたいと思う(64.3%)」、「自分は責任がある社会の一員だと思う(61.1%)」、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う(45.8%)」等の質問項目で顕著な低さが見られ、社会参画意識の低さが際立っている。

このような社会的背景を踏まえ、学習指導要領では社会に参画する力とその育成が重視されており、学校教育において社会参画に向かう過程を体験的に学ぶことができる特別活動の重要度が高まっているのだと考える。

### 1-2 特別活動の現状及び課題

特別活動を通して社会参画意識を高めることが重視されている一方で、現状の学校教育において、社会参画意識の基盤となる自治的な活動の実践が十分ではない状況があることが見られる。

令和4年度全国学力・学習状況調査[生徒質問紙]結果では、設問46「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、たがいの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」に対して、「とてもあてはまる、あてはまる」と肯定的な回答をした中学3年生の割合が、全国で29.0%と大変低い。

この質問項目は学級活動を対象にして、学級の課題の発見・設定、合意形成を図る話し合い、解決方法の決定、という自治的な活動のプロセスについて尋ねている。

この調査は4月末に行われており、学級生活がスタートして約1カ月という早い段階で生徒に尋ねたものではある。しかし、多くの学校で年度初めには特別活動（学級活動）の時間が設定され、「学級開き」、「学級の役割決め」、「学級目標決め」等で、設問にあるような自治的な活動の過程を踏むことは十分想定される。

それにも関わらず、肯定的な回答が低いことから、社会参画意識の基盤となる自治的な活動の実践が中学校現場において十分ではない状況がうかがえると考えた。

また、自治的な活動をする最小単位である学級がそのような状況であることから、学校全体で展開される生徒会活動は、自治的な活動の過程を踏むことが、十分ではない状況が一層あると推測される。

さらには、学校教育において、社会参画意識の基盤となる自治的な活動の実践がこのように十分ではないことが、先述のような社会参画意識の低さの要因の一つであるのではないかと考える。

これらのことから、本研究では、特別活動のうち中学校の生徒会活動に焦点をあて、生徒が主体的に学校づくりに参画する場として生徒会活動を位置づけることで、社会に参画する態度や自治的能力を育成することができるのではないかと考え、実践研究を行うこととした。

## 2. 先行研究の検討

特別活動の改善を目指す実践を構想するにあたって、2つのテーマで先行研究の調査を行った。1つが学習指導要領における特別活動の目標の歴史の変遷に関する調査、もう1つが特別活動の活性化を企図する実践研究に関する調査である。

この2つのテーマに関する調査を行うことで、今回取り挙げている社会参画意識や自治的活動がどのように位置づけられてきたか、現在、どのような状況に置かれているか見出すことができると考えた。

### 2-1 学習指導要領における特別活動の歴史の変遷に関する先行研究

特別活動に関する先行研究の主たる系統の一つとして、学習指導要領における特別活動の歴史の変遷を取り扱ったものがある。

篠塚（2020）は、「民主主義というものを実践的に学ぶ場として、特別活動は置かれていた。ところが、政治状況の変化によって、戦後の民主主義のあり方が動揺するとともに、特別活動のあり方にも変化が生じていった。（中略）生徒会活動をはじめとする特別活動における諸活動は、人間関係を形成する能力を養う場、集団への帰属意識を高め集団の一員であることを自覚する場へとなっていった」（p. 65）と述べている。

表1は、篠塚（2020）の主張をもとに、筆者が作成したものである。

表1 篠塚（2020）における特別活動の位置づけの特徴と社会的背景

学習指導要領	特別活動の位置づけの特徴	社会的背景
1951年『学習指導要領一般編（試案）』（特別教育活動として）	民主主義の原理を生徒たち自身が身をもって学び取り、公民的資質すなわち主権者たる市民としての資質を身につけるべく設置された	GHQの影響による民主化
1958年中学校（引き続き、特別教育活動として）	・「民主的」あるいは「民主主義」という言葉が見られなくなる ・「生徒自発的な活動を助長することがたてまえであるが常に教師の適切な指導が必要である」	民主化に対する「逆コース」へと振れ
1969年版（特別活動の名称が用いられる）	・「集団の一員としての役割を自覚」、「他の成員との協調」、「集団の向上発展に尽くす」…社会的適応力についての部分が強まっている	高校紛争 文部省「高等学校における政治的教養と政治活動について」
1977年版～1998年版（類似性が高い）	・内容などに関する記述量が大幅減 ・目標に「民主的」、「公民としての資質」、「自治」等の文言が見られなくなる	・高校社会科の「解体」 ・新自由主義的政策
2008年版	・新たに「人間関係を築こうとする」という文言の登場 ・「望ましい人間関係を形成」、「集団や社会の一員」、「集団への所属観」の強調	地域共同体やコミュニティの崩壊

篠塚の論によると、特別活動の学習指導要領における位置づけは、1958年版学習指導要領で「民主主義」という文言が消えて教師の指導が必要であることが明記されたことに始まり、1969年版以降は人間関係を形成する能力を養う場、集団への帰属意識を高め集団の一員であることを自覚する場としての役割が強まっていった。

また、加藤（2024）は、特別活動が民主主義教育の場から、1950年代後半以降、生活指導（生徒指導）や道徳教育の場が変わっていったと指摘している。

これら学習指導要領における特別活動の歴史的変遷に関する先行研究から、特別活動が、民主主義を実践的に学ぶ場から変質したことで、中学校において生徒が自治的な活動を行い、それによって学校づくりに参画する場としての位置づけも弱まったと分かった。

また、位置づけが変質したことにより、指導の手法の側面からも、生徒が主体的・実践的に学ぶよりも、教師が主導して帰属意識や集団の一員としての意識を感じさせたり、生徒指導や道徳教育を行ったりする手法のほうが、親和性が高くなっていったと考えた。

## 2-2 生徒会活動の活性化を企図する実践研究

一方で、生徒会活動の活性化を企図する実践研究でも、民主的・自治的な活動としての位置づけが揺らぎ、教師が行う生徒指導を生徒が代行するように評価・点検活動を行うことを活性化の手立てとするものも散見される。

明石・小川（1996）をはじめ、生徒会が中心となって、学校の「荒れ」やいじめ事象等の解決に向けて活動を展開するものも報告されている。学校が深刻な「荒れ」やいじめに直面している際には、確かに生徒にとっても自ら見出した学校生活上の課題は、暴力やいじめを撲滅すること、であるだろう。

一方で、佐藤（2011）や高橋（2012）のように、「挨拶をすること」や「時間を守ること」、「服装の違反をしないこと」等、生徒指導上のきまりを生徒が守るように、生徒が委員会活動を通して呼びかけをしたり、ポスターを作成したりする実践も報告されている。報告者もこれまでの教職経験の中で、「無言掃除の出来具合」や「給食の食べ残しの量」を生徒が委員会活動を通して点検し、達成状況を学級で競わせ全校に発表することで啓発を図るような生徒会活動の実践も数多く見てきた。

これらは、生徒が自ら課題意識を感じていて、その解決のために活動を設定する自治的な活動として果たして成立しているのか、疑問である。生徒会活動の目的が喪失し、教師が望んでいることを、生徒が代行してさせられていたり、点検する生徒とされる生徒を分断したりしているのではないだろうか。

また、堀口（2006）に見られるように、活性化の手法の一つとして、学校行事の企画や運営の場面に、生徒会活動を位置づけている実践もある。しかし、活性化が一時的であることや生徒自ら見出した課題ではないことから、教師の意図した活動の「下請け」になることにつながっているのではないだろうか。

委員会活動を評価・点検活動や行事中心にすることは、生徒にとっては活動の結果が現れやすく、教師にとっても指導が楽である。一方で、活動そのものをルーチンワーク化させて形骸化を起し、生徒会活動で育成を目指す自治的能力を育む場の喪失、生徒会活動への生徒の主体性の低下、ひいては社会参画意識の低下につながっていると考えた。

子供の社会参画や自治的活動の重要性が言われる中で、小松（2017）は、ファシリテーショングラフィック（以下、FG）の手法を取り入れ、生徒全員の意見から生徒会スローガンを作成、達成状況を評価することで、生徒の主体性を向上させる実践を報告している。

小松（2017）の実践では、活動前に、生徒が生徒会役員選挙の公約をもとにして、年間を貫くスローガン（合言葉）を設定し、どのような自分たちの姿を達成目標とするのかを生徒が明確にしている。また、それに向けた活動をどのように評価してゆくのか、やはり生徒が設定し、共有している。他者から与えられた目標や評価方法ではなく、生徒が自ら立てた目標の達成を、生徒が自ら評価することを実践した点で意義深い。

小松（2017）は、研究の成果として、FG による話し合い及び目標と評価の可視化によって、生徒、職員ともに目標を共有し、自分と仲間の行動と目標に照らして意識的に見るようになり、みんなが同じ方向を向いた活動になる効果が認められたとしている。

一方で、他の先行実践と同様に、生徒会活動のそもそもの目的に立ち返っていない点に課題があると考え。目標及び活動が学校行事を軸としたものになっており、生徒が計画した活動の内容にも、教師が行う生徒指導的なものが散見された。

### 2-3 研究の方向

学習指導要領における特別活動の取扱いの歴史的変遷に関する先行研究の検討から、特別活動の位置づけが「自治を学ぶ場」から変質していったことが分かった。

また、現場における実践においても、自治的な課題解決のサイクルが行われづらくなり、教師主導の活動や評価・点検のような教師の「下請け」のような活動、学校行事が主たる目的にすり替わった活動等が増え、自治的な活動の形骸化が見られることが分かった。

本研究では、これら先行研究の検討から見えてきたことをもとに、生徒会活動を本来の自治的な活動の場として機能させるために、①生徒が自治的な活動の本来の目的に立ち返る場を設定すること、②目的を踏まえながら、教師から与えるのではなく、生徒が自ら活動の目的や評価の手立てを計画し、活動を運営することができるようにすること、この2点を方向とした。

### 3. 実践研究の対象と方法

実践に先だって、報告者について記述する。報告者は、対象校に在籍して9年目の教員である。現在、県の現職教員派遣事業で大学院に在学中（2年目）であり、令和6年度は、対象校の教職員の一人として、対象校の生徒会活動に実際に関わり生徒会役員や顧問をサポート（助言や提案等）しながら、生徒会活動の実際や生徒の反応などを観察し研究に取り組んでいる。

#### 3-1 研究の対象

##### 3-1-1 A中学校の生徒会活動の実態

対象は熊本県のA町立A中学校である。A中学校の生徒数は450人強で各学年4クラスと、A町を含む郡市では中規模の学校で、生徒は落ち着いている。

近年、採用から3年以内の若手教員が生徒会活動を担当することが続いており、指導への困り感が担当教員につのっている。職員構成のバランスがとれているため、例年2名ずつ初任者や再配置（採用4年目）の教員が配置されることが続いている。そして、彼らが、学校の幅広い部署との連携を要する校務分掌を担当することを通して、教員としての資質・能力を向上させることを意図して、生徒会活動の担当に指名されることが多い。

また、生徒会活動の実態として、目的が失われており、活動が前例踏襲で見直されていないことによる形骸化や、行事の準備や進行が主たる活動になっていること、教員に言われたことをする受け身な活動になりがちであること、点検活動・当番活動が自己目的化していること、学校で育成を目指す資質・能力に繋がっていないこと等の現状があると、報告者は観察で見取った。

##### 3-1-2 A中学校の生徒会活動の課題

報告者の見取りが確かなものであるか、校内の委員会活動の指導を担当する教職員を対象にして、令和5年12月に質問紙調査を実施した。

設問3「今年度、A中学校の生徒会活動は、どのような状態だと思われますか。」という質問をしたところ（自由記述にて回答を求めた）、図1のような回答が得られた。

形骸化、前例踏襲、受け身等のキーワードが見られ、「きちんとしている」と答えた教職員も、「決まったこと、これまでに行ってきたことならしっかり取り組むことができる」と指摘していた。

報告者が観察で得たものと同様の問題意識が述べられていると捉えた。

生徒の様子でも、生徒会活動に対しての意識が低く、例年10月末に実施している生徒会役員選挙の立候補者が不足するため、担任教師がクラスから一人は候補を出すことを呼びかけたり、立候補者の選挙演説でも、実態の分析やビジョンがなく、公約にあれをしたいこれをしたいと方法ばかりが乱立したりする状況が見られた。

図1 教職員向け質問紙 設問3の対する回答

- ・年間クラスチャレンジを1つの軸として活動を進めている。それ以外の活動はあまり活発ではない様子。
- ・生徒が自主的に活動する場面が多く見られた。
- ・活動が形骸化しているものが多い。
- ・前年度を踏襲しすぎており、活動の見直し、改善が少ない。
- ・今まで伝統的に行われてきた常時活動を行うとともに、委員長が就任当初に計画した内容をもとに毎月の活動を行っている。活発ではないが、新しいことを行っているわけではないので停滞感を感じている。
- ・各委員会の仕事をきちんとしている。決まったこと（これまでにやってきていること）ならしっかり取り組むことができる。
- ・教師側からの提案を受け身で行っている印象。委員会のそれぞれの年間計画に具体性がなく見通しが持っていない。

（令和5年12月に実施。自由記述で回答のあったものすべてを記載）

また、1年次の10月に選挙で当選し、役員を1年間務めた生徒にインタビューをしたところ、次の選挙には立候補しない旨が聞かれ、理由として、面白くないこと、行事や集会の挨拶や決められていること、教師の言うことばかりをしていて、したいこと（公約等で述べたこと）ができないこと、立候補前に想像していた活動とは違いすぎるものが語られた。

この役員経験者の生徒へのインタビューからも、形骸化や前例踏襲、受け身（教師主導）に類する要素が聞かれた。

そこで、実際に行われている活動を一覧できる「生徒会活動年間指導計画」（図2）の分析を行った。これは各年度当初に生徒会担当の教師と生徒会役員が共同で作成しているものである。

A中学校の生徒会組織は、11の専門委員会と生徒会役員6名（会長1名・副会長2名・書記2名・会計1名）で構成され、全校生徒が会員である。この12の専門委員会は、日常的に行う「常時活動」と各月の「テーマ活動」を行っている。「常時活動」を分析したところ、すべての委員会が前年度を踏襲していること、「テーマ活動」では、36コマの活動が形骸化・自己目的化していると思われる点検・当番活動となっており（図2の黄網掛けのコマ）、学校生活の改善・向上という本来の目的意識が共有されることがないまま活動が行われていた。また、A中学校では、先行研究の調査でも見られた、学校行事のための準備が委員会活動の大半を占めているコマが、生徒会年間活動計画のうちの45コマに見られた（図2のオレンジ網掛けのコマ）ことも顕著な特徴として見られた。

以上のようなA中学校の実態を踏まえ、A中学校の課題は、「生徒の主體的な活動になっていないこと」「活動が教師の指導力に依拠しがちで、負担感があること」「前例踏襲や



### 3-2 実践の構想と手立て

先行研究の調査及びA中学校の実態調査から見えてきた課題をもとに、実践を構想した。

全体構想として、大きな方針は生徒会活動を目的で貫くことである。先行研究の調査でも、A中学校の実態でも、課題の根底にあるのは生徒会活動の目的の喪失であると考えた。学校における生徒会活動の目的の喪失が起こった結果、生徒会活動のそもそもの目的や意義は何なのか不明なまま生徒も教師も活動している。そのため、活動への納得が伴わないために生徒の主体性の減退につながり、安易な活動や楽な指導を求めた結果、活動の見直しが行われずに形骸化、点検・評価の自己目的化、行事中心の活動などの現象が起こっていると捉えた。そこで、生徒とともに生徒会活動の目的を確認すること、そして、日常の生徒会活動に関する指導も目的で貫くことで、まず生徒会活動から生徒たちが学校づくりを担う機会とすることを狙い、手立てとすることを構想した。

生徒会活動が自治的な活動を目指すことを確認することで、生徒も教師も、目的に準じて活動の見直しができたり、生活上の解決したい課題の設定から始まる課題解決サイクルの端緒とさせたり、生徒会活動の主体が「指導する教師」から、「自治的に活動する生徒」に戻るのではないかと考えた。

また、特に委員会活動については、目的で貫くことを効果的に行うためのマネジメントツールの導入を構想した。1枚にまとめられ、活動の目的が位置づけられ、それに基づいて1年間を見通し、目指す姿や解決したい課題と方法を設定し、実践、評価までを行うことで、生徒が自ら学校生活の改善・向上を主体的に行うことができることを意図した。

このマネジメントツールは、生徒と指導する教師が目的や目指す姿、そのための活動等を共有する効果を発揮し、ともに学校づくりに向かうようになることも想定した。

#### 3-2-1 目的で貫く生徒会リーダー研修の改善

手立ての1つ目として、学年末に生徒会執行部（四役6名と委員長11名）が実施している生徒会リーダー研修の見直しを構想した。

従来の生徒会リーダー研修は、ワークショップ形式で2時間ほどをかけて行っていた。プログラムは、学校の実態の分析から次年度の生徒会年間活動スローガンの策定と、生徒会年間指導（活動）計画（図2）の作成をしていた。

従来は、「そもそも生徒会活動とは何か」「何を目指す活動なのか」を確認することを欠いていた。学校の実態分析を位置づけている点はよいのだが、ゴールや活動の範囲が不明のまま、実際の活動である「スローガンの策定」や「年間活動計画の立案」を教師から「与えられる」ことで、生徒は「この活動をしてよいかどうか」を逐一担当教員に判断を仰がなければならない状態にあった。このことが活動の不活性や教師主導のきっかけになっていると考えた。

このリーダー研修を、生徒会担当のG教諭とS教諭と相談しながら、ワークショップ形式は維持しつつ、生徒会活動の目的の確認を中心に、A中学校の生徒会活動の全体像の確

認、リーダーシップの発揮と生徒会活動の動かし方の確認に変更し、コンセプトを「目的で貫く」ワークショップとした。また、スローガンの策定や年間計画の立案等の実際の活動は設定しないことで、教師から活動を与える状況もなくすこととした。

目的、全体像、リーダーシップの発揮と活動の動かし方を生徒とともに確認することで、生徒が活動の主体になるための、基盤として機能すると考えた。生徒が「この活動をしてよいか」と迷った際、自分たちで、目的から逸れていないか立ち返ることにつながることを意図した。

### 3-2-2 目的で貫くための合言葉の設定

リーダー研修での生徒会活動の目的の確認、日常の生徒会活動に関わる指導を行う際の手立てとして、目的で貫くための生徒会執行部の指導を担当する教師の共通の合言葉として「そもそも論に立ち返る」を設定することにした。

生徒会担当のG教諭とS教諭と活動の見直しについて議論していた際、教師が「去年はどうしていたか」と発言しがちであることが話題に挙がり、これが前例踏襲に陥る原因の一つであると考えた。

そこで、A中学校のH校長が学校経営のキーワードにしている、「そもそも論に立ち返る」を生徒会活動でも合言葉とすることにした。

合言葉によって活動の目的に立ち返ることで、前例踏襲を防ぐことをはじめ、点検・評価活動や行事の準備が中心の活動となる委員会を見直すきっかけになることを意図した。

リーダー研修から導入することとし、「そもそも、生徒会活動は何を目的にした活動なのか」、「この委員会は、そもそも何のためにあるのか」、「挨拶運動は、そもそも何のためにしているのか」等を意見交換の話題として位置づけ、担当教師が意図して使うように位置付けた。

リーダー研修後も、担当教師で意図して使うことを継続することとした。

### 3-2-3 目的で貫くためのツールの導入

手立ての3つ目として、太田（2023）のマネジメントツール「成長モデル」を、A中学校の生徒会活動用に改変して導入することにした。

「成長モデル」は、育成を目指す資質・能力、目指す姿、それに対する現状、現状から目指す姿に迫るためのマネジメントラインを中心に、達成度を表す縦軸と1年間の流れを表わす横軸で構成しているマネジメントツールである。

A中学校の生徒会活動の主たる活動は、年間通しての執行部および11の委員会の活動である。全校生徒が所属しており、月1回30分の委員会活動の時間に、昨月の委員会の活動の振り返りや今月の活動の計画を行い、1か月を通して計画した活動を実行している。

昨年度までは、先述の通り、3月の生徒会リーダー研修で、委員長が作成した年間活動（指導）計画（図2）を使用していた。

この活動計画では、生徒会全体や個々の委員会の活動の目的が位置づけられておらず、漠然としたスローガンが掲載されるにとどまっていた。

また、そのスローガンと実際の各月の活動が紐づいていないことが常態化していることも、活動の前例踏襲や形骸化の原因となっていた。

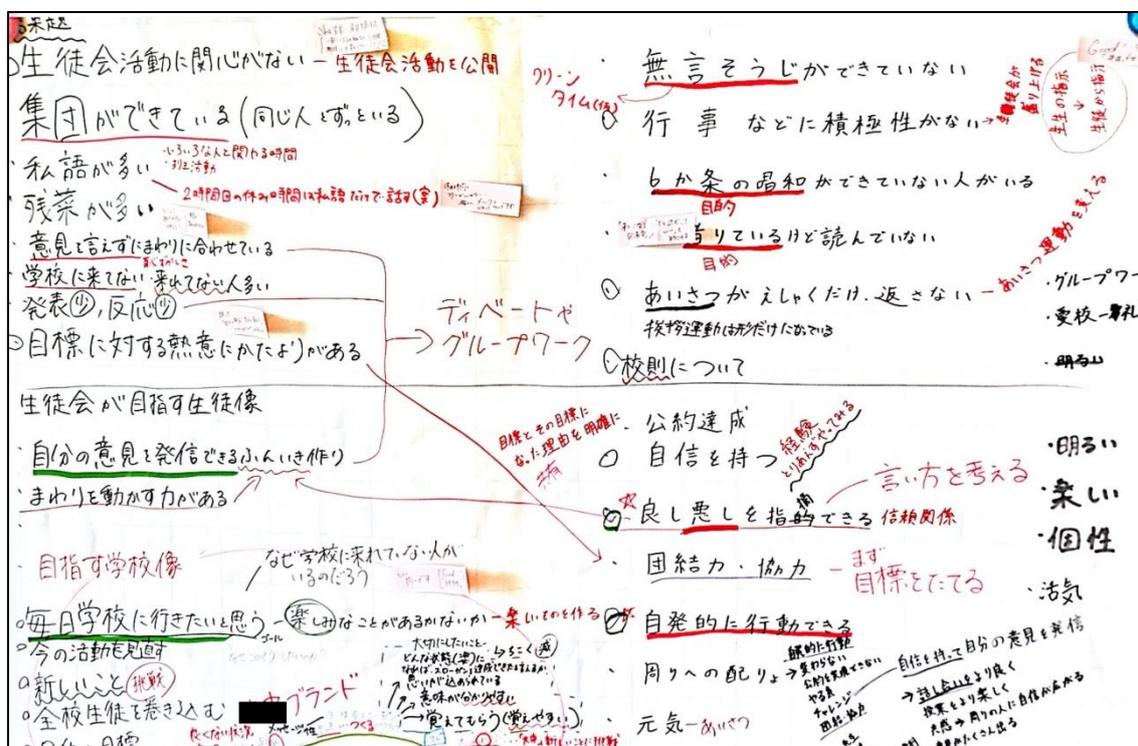
そこで、実態から目的を位置づけ、それに向かう活動を生徒が自ら計画するための、新しい生徒会年間活動計画の導入について、生徒会役員と熟議を行った。生徒会リーダー研修後、生徒会役員は、自ら学校や生徒の現状について、模造紙に整理を始めていた（図3）。

図のように、情報が雑然と並んでおり、項目相互の関係性等が見出すことができない状態だった。

そこで、生徒会全体や各委員会の活動における、目的や目指す姿、実態とその解決方法と実際の活動を明らかにすることができる、「成長モデル」を導入することにした。（図4）

導入の過程としては他に、まず春季休業中に執行部が作成、4月当初の専門委員会の時間に各クラスから集まった全委員で修正、学級会・5月の生徒総会で第3号議案として審議を経て執行することにした。

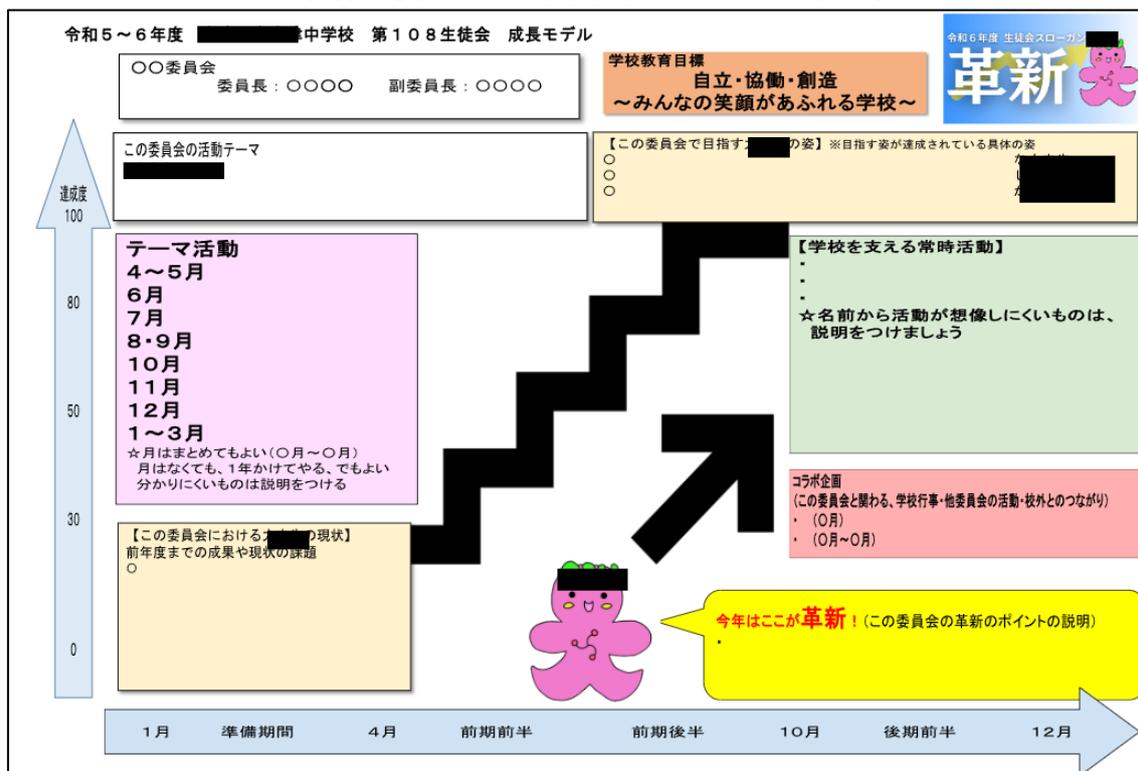
図3 生徒会役員が作成した模造紙



### 3-3 検証の手立て

本研究の目的は先述した通り、生徒が生徒会活動の目的に立ち返る場面を設定し、その目的を踏まえながら生徒が自ら活動の目的や評価の手立てを計画して活動を運営することができるようにすることで、社会に参画する態度や自治的な能力の育成を目指すことである。

図4 実際に使用したA中学校版「成長モデル」の様式



そのため、社会に参画する態度の醸成を検証する手立てとして、生徒会役員の任期が変わる令和5年と令和6年それぞれの12月に質問紙調査を行うこととした。対象は、経年変化を見るために、令和5年度の1・2年生（進級して令和6年度の2・3年生）とした。

設問は、18歳意識（第62回調査）「自身と社会の関わりについて」の質問「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」を改作した「あなたは、生徒会活動を通して、学校を変えられると思いますか」に加え、A中学校の教育実践キーワードである「私たちの学校は、私たちが創る」から、「私たちの学校は、私たちでつくっていると感じていますか」とし、4件法（よくあてはまる・あてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない）で回答を求めた。

自治的な能力の育成については、生徒会執行部（役員6名、専門委員長11名）の活動の状況や手立てを行った後に現れた新規の活動の様子を記述したり、活動の毎月に設定された専門委員会の時間後に執行部に生徒会活動全体や委員会活動の運営状況に関するグループインタビューを9か月間継続して行ったものを記述したりして、分析をすることにした。

加えて、生徒会活動に関わる大きな行事の事後には、無作為抽出で生徒や教員に対してインタビューを行い記述することとした。

また、教師が生徒の活動をどう捉えているか、令和5年と令和6年それぞれの12月に教師対象の質問紙調査も行い変化を捉えることにした。

#### 4. 実践研究の実際

生徒会は目的で貫く活動を令和6年12月まで9か月間、展開した。従来行われていた活動と比較すると、以下の表2のようになった。

表2 生徒会執行部の従来の活動と目的で貫く活動の比較

月	従来行われていた活動	目的で貫く、今年度の活動
常時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒昼会の配信</li> <li>・ 挨拶運動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒会広報・ホームページでの発信</li> <li>・ 生徒昼会の配信</li> <li>・ 生徒議会での提案、審議</li> <li>・ 全校アンケートに基づく活動（年3回）</li> <li>・ 形骸化した挨拶運動の見直し</li> <li>・ 集会でのタブレットを用いた発表の導入</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒会リーダー研修 （スローガンの策定、年間活動計画の作成）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒会リーダー研修 （生徒会活動の目的、リーダーシップ、生徒会活動の動かし方の確認）</li> <li>・ 学校や生徒の実態把握のための全校アンケートの実施</li> <li>・ 実態に基づくスローガンの策定と生徒集会での第108期生徒会の方針説明</li> <li>・ 令和6年度生徒会「成長モデル」作成</li> </ul>
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対面式での委員会紹介 （委員長から、主な活動の説明）</li> <li>・ 体育大会結団式</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対面式での委員会紹介 （委員長から、各委員会の活動目的及び現状から目標に向かうストーリーの説明、委員の募集）</li> <li>・ 体育大会結団式 （委員長から、行事の目的と意義の説明）</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体育大会への協力 （各委員会の当番活動）</li> <li>・ 生徒総会 （生徒会規約の改正、年間予算・年間活動計画の審議、校則の改正）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体育大会への協力 （一委員会一役運動）</li> <li>・ 目的に向かう新種目の設置</li> <li>・ 生徒総会 （生徒会規約の改正：校則改正条項の新設と新役職「広報」の設置、年間予算・「成長モデル」の審議、校則改正の手順の決定）</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校内行事の挨拶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校則改正に向けた自主研修会</li> <li>・ 文化的行事の再開に向けた提案</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校内行事の挨拶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校則改正に向けた素案作り</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 町行事への対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 町行事への対応</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 町行事への対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 町行事への対応</li> <li>・ 校則改正に向けた職員アンケート</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県行事への対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校則改正に向けた提案と生徒議会での審議</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年間の振り返り</li> <li>・ 次期役員への引継ぎ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「成長モデル」を使った、目指す姿の達成状況の確認</li> <li>・ 次期役員への引継ぎ</li> </ul>

活動の目的を確かめながら、執行部は従来の活動を見直し、また新たな活動を展開していった。

常時活動では、従来行われていた挨拶運動は見直し、生徒昼会の配信は機材のセッティングから生徒自らがするようになった。(生徒昼会は、従来、生徒会主催で生徒集会を体育館で行っていたものが、感染症流行以降、給食時間中のオンライン配信の形式に変わったものである。)新たに生徒会広報誌やホームページでの情報発信、生徒議会を復活させての議案の提案や審議、全校アンケートに基づく活動(年3回)、集会でのタブレットを用いた発表の導入等が行われた。形骸化し、「させられていた」活動は止め、新たに自分たちで目的を見出した活動に主体的に取り組むようになったのだと考える。

各月の活動について、以降にそれぞれ紹介する。

#### 4-1 目的で貫く生徒会リーダー研修の改善

生徒会活動の目的を生徒とともに確かめるため、生徒会役員とリーダー研修を令和6年3月8日、卒業式終了後の午後から実施した。執行部(役員6名と専門委員長11名)と生徒会担当の教師2名が参加した。

図4 実施したリーダー研修の様子



実施したプログラムは以下の通りである。

##### ①生徒会活動とは何か、何を目的にするのか。

文部科学省・国立教育政策研究所教育課程研究センター『学校文化を創る特別活動 中学校・高等学校編』に示された、生徒会活動の定義「生徒会活動は、生徒一人一人が学校における自分たちの生活の充実・発展や学校生活の改善向上を目指す、生徒の自発的、自治的活動」を参加者と確認した。

定義を確認した後、参加者を4人ずつのグループに分け、定義に関する複数の問い「生

徒一人一人が生徒会活動において役割があるか」、「自分たちの生活の充実・発展や学校生活の改善向上に向かっていくか」、「自治的・自発的活動になっているか」について、意見交換の時間を設けた。

意見交換後には、参加者からの意見をもとに、以下の4点について補足を行った。

- 1) 例年の生徒会活動は、リーダーだけの活動に留まりがちであったが、本来の活動を行うためには、生徒会のリーダーたちに全校生徒を巻き込む力が求められること。
- 2) 活動が、「～をしよう」という呼びかけをして終わりになりがちであること。一度で課題が解決するとは限らないので、「問題の発見・確認」・「解決方法の話し合い」・「解決方法の決定」・「決めたことの実践」・「振り返り」のサイクルを回し、次のサイクルへ繋げることに価値があること。
- 3) 失敗すること、うまくいかないこともあるが、指導する教師たちが、中学生の「学ぶ権利」を保証すること。
- 4) 「自治的・自発的」とは、創意工夫があること。前例踏襲は、自治的・自発的とは言えず、決められたことを進んでやる「自主的」とは違うこと。

## ②リーダーシップとは何か（いろいろなリーダーシップの在り方）

グループワーク「ドローイング・チャレンジ」に取り組みながら、数種類のリーダーシップの発揮の仕方を参加者に体験させた。「ドローイング・チャレンジ」は、ペットボトルの先にペンが固定された道具を使い、参加者はそれぞれの人差し指のみを使って、グループ4人全員で協力してお題の絵を描く活動である。参加者には、グループで協力してお題の絵を描く活動を複数回体験してもらった。その都度、複数のリーダーシップの発揮の仕方を紹介し、それを踏まえた具体的な声掛けをするように促した。「ドローイング・チャレンジ」の後、体験したそれぞれのリーダーシップの発揮の仕方が、生徒会活動のどんな場面で活かすことができそうか、振り返りと意見交換の時間を設けた。

## ③A中学校の生徒会活動の全体を知ろう

続いて、報告者が作成したスライド（図5）を示し、A中学校の生徒会活動の範囲について確認しながら、参加者にグループでの意見交換を促した。

スライドの構成要素と意図は次のとおりである。

生徒会組織図（A中学校生徒会規約に含まれる）と職員会議との関係を記載し、全体のイメージや各種議会（学級会・生徒議会・生徒総会）との位置関係を掴ませることを意図した。生徒が活動を見直す際に、たどるべきプロセス（発議や議決の手順）をあらかじめ知らせることで、教師に頼らない活動を促し、生徒の自治的な活動を導くことができると考えたからである。

また、自治的な活動の実践例（文部科学省・国立教育政策研究所教育課程研究センター

『学校文化を創る特別活動 中学校・高等学校編』より引用)及び「学校行事・地域活動との関連」を記載した。中学校学習指導要領に記載された生徒会活動の内容「(1)生徒会の組織づくりと生徒会活動の計画や運営」・「(2)学校行事への協力」・「(3)ボランティア活動などの社会参画」を明示し、活動の偏りを抑止することを狙ったためである。先述の通り、A中学校の生徒会活動は、課題として「(2)学校行事への協力」に活動が偏りすぎている委員会活動が散見され、「(1)生徒会の組織づくりと生徒会活動の計画や運営」が軽視される傾向が見られた。また、学校行事の準備の業務の一部を、教師が生徒に代行させることを委員会活動とする様子も見られた。このような本来の目的が失われて自治的な活動が阻害されている状況の改善につながるのではないかと考えた。

さらに、A中学校の生徒会活動の近年の活動の履歴(「A中生徒会が創り、受け継いできた財産」)を記載した。前の期からの引継ぎが適切に行われていないことや、毎年の変更によって、生徒会活動から派生した活動の把握が行われておらず、活動が独り歩きしたり、活動の所管が生徒会なのか教師なのか不明になったりしているものが散見された。この機会に、それぞれの活動の始まった時期や経緯、所管を明らかにし、本来の生徒会活動の目的に立ち返り、継続や廃止について生徒による意思決定のきっかけにすることを狙った。

#### ④生徒会活動全体を動かすとは、どういうことか

ここまでの活動を踏まえて、生徒会活動の動かし方について意見交換を行った。話題として報告者から、以下の5点を視点として提示した。

- 1) 目標(ゴール)としてのスローガンの設定・全校で意識を共有するには
- 2) 目標達成のための活動や支援(公約等の四役固有の活動、各委員会を支援する活動)
- 3) フィードバック(達成状況の確認と伝達)をいつ、どんなかたちにするか
- 4) それぞれの役職で身につけるべきスキル
- 5) 企画の「原案」の作成の仕方:生徒議会・総会で決議⇒大人(職員会議)に提案

#### ⑤生徒会活動への、先生たちからの願いと学校教育目標「自立・協働・創造」

最後に、学校教育目標を提示し、生徒会活動をはじめA中学校での学校生活を通じて、「自立・協働・創造」の資質・能力(図6)を身につけてほしいことと、それをA中学校のすべての教職員でサポートすることを報告者と生徒会担当のG教諭から伝えた。

図5 プログラム③で実際に使用したスライド

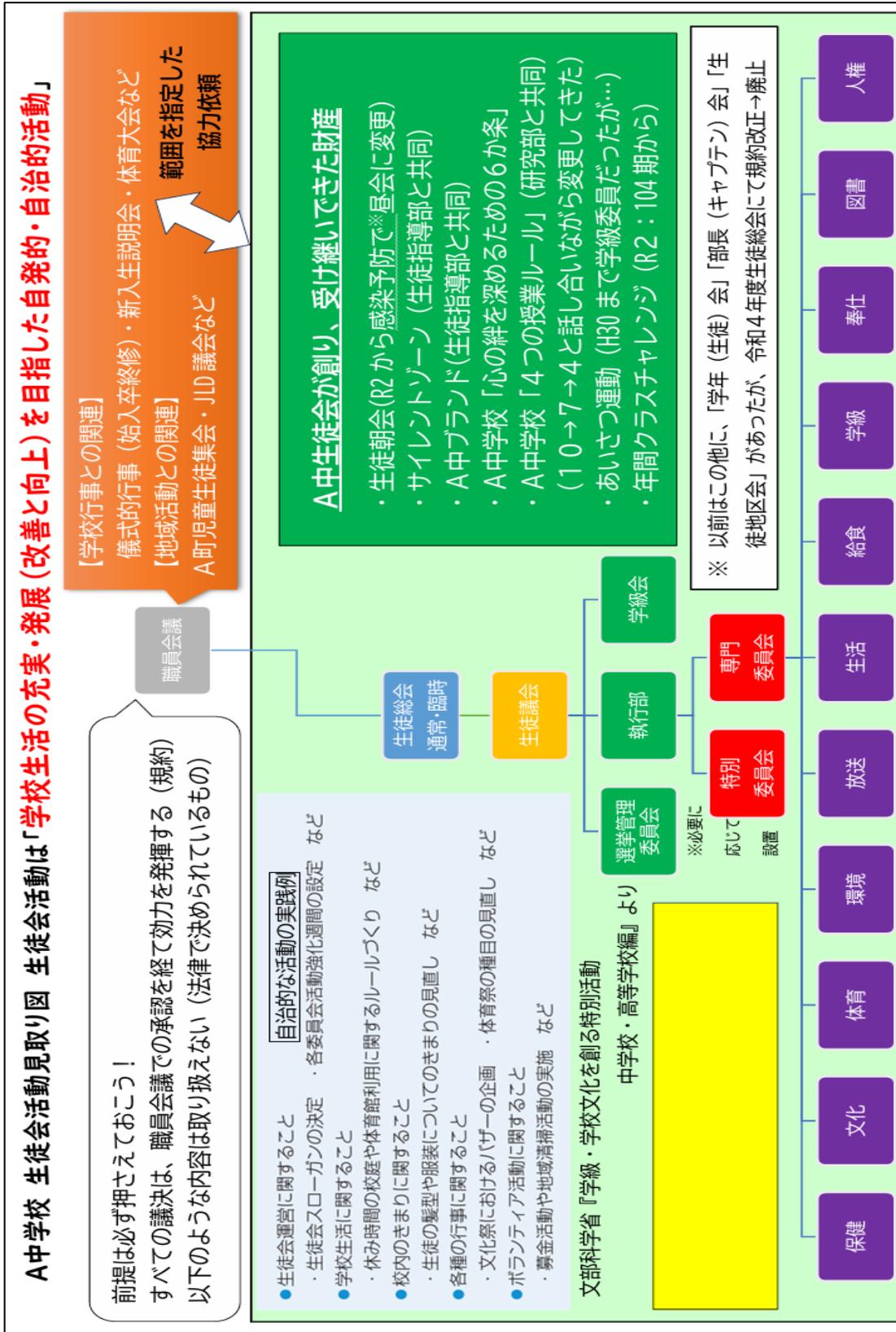
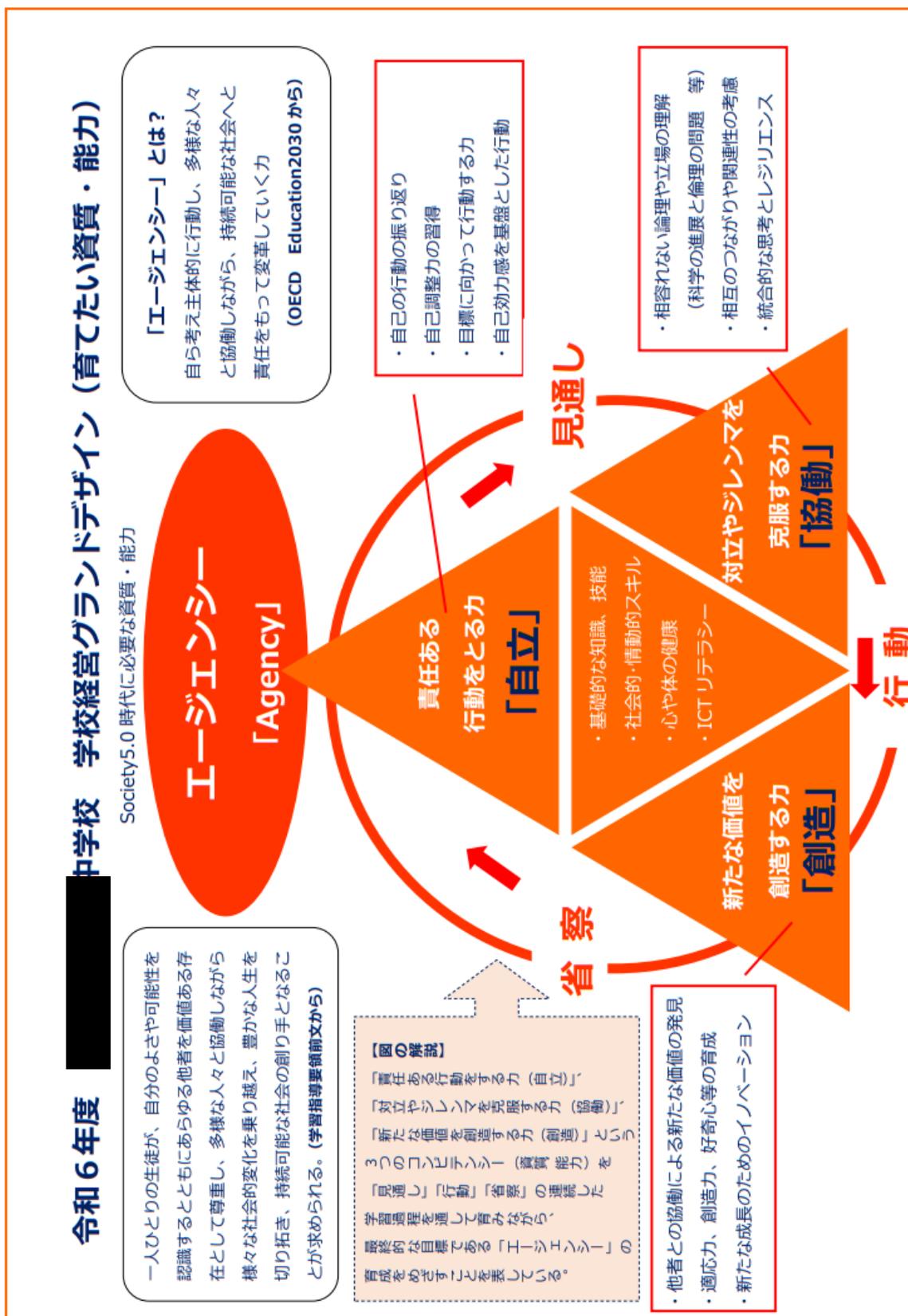


図6 プログラム⑤で実際に使用したスライド（A中学校グランドデザイン）



#### 4-2 「成長モデル」を使った年間活動計画の見直し

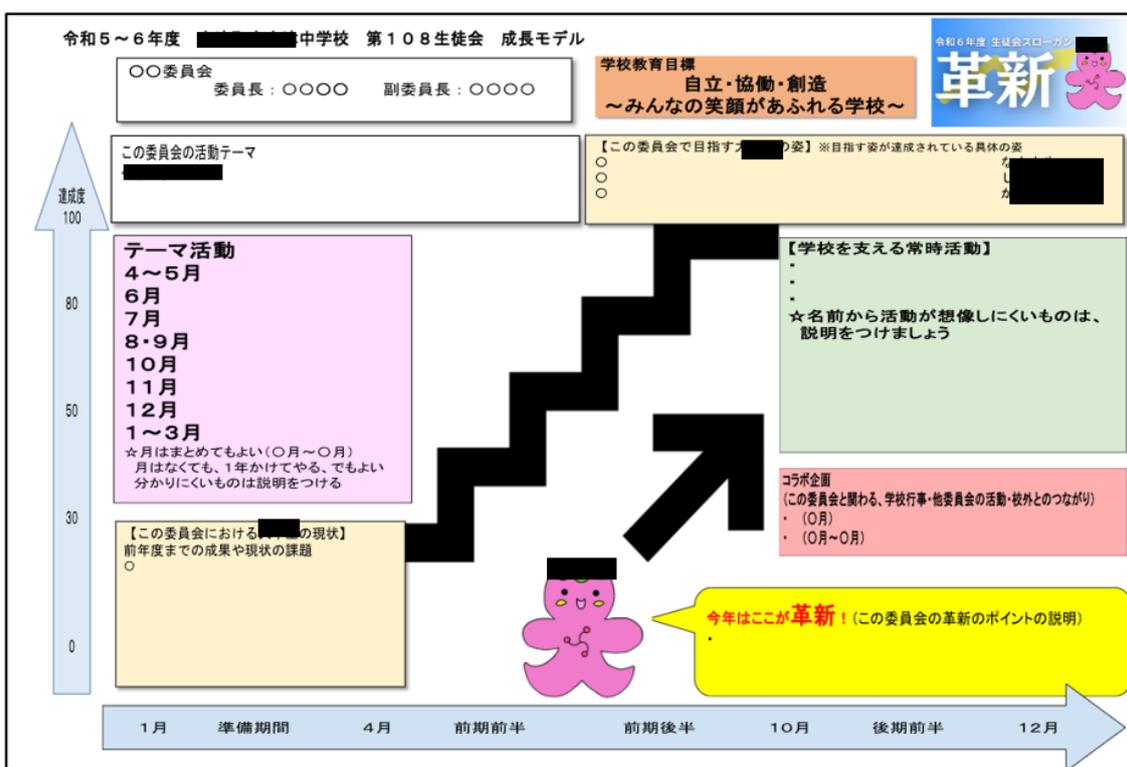
生徒自身が自治的な活動を企画・運営するため、年間活動計画表として太田（2023）のマネジメントツール「成長モデル」を導入した。

まず、導入の目的について確認し、役員と生徒会担当教師と導入を決定した。

導入に際しては、A中学校の生徒会組織に合わせて、2種類作成し、生徒会活動全体版を役員で、各専門委員会版を11の専門委員会それぞれ作成することとした。

また、様式についても、A中学校の生徒会活動に合わせ、右上に学校教育目標と生徒会年間活動スローガンを配置すること、成長を表す階段の左右に、「テーマ活動」と「学校を支える常時活動」、「コラボ企画」を配置することを決定した。（図7）

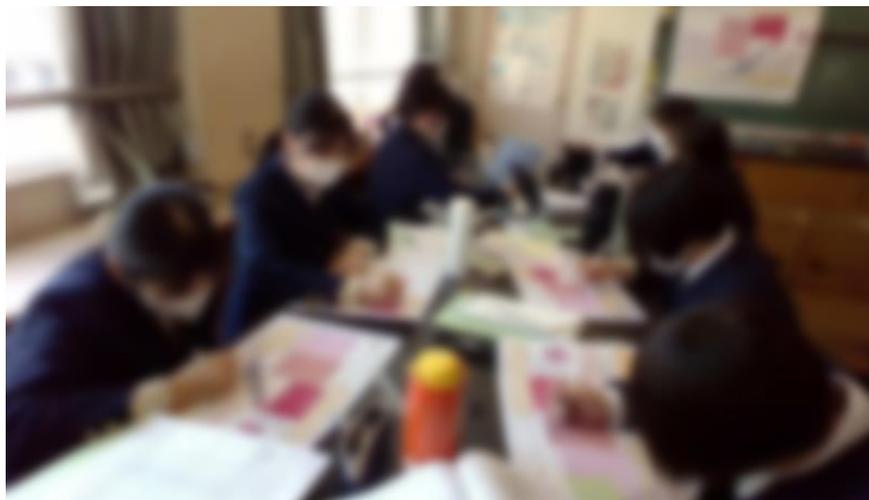
図7 決定したA中学校版「成長モデル」の様式



作成した様式を使い、まず、春季休業中に執行部で会議を持ち、2種類の「成長モデル」の記入を行った。（図8）記入に際しては、手順を以下のように揃えた。

- ①まず、モデルの左下に、「この委員会におけるA中学校の生徒の現状」を記入した。
- ②次に、活動の目的としての「この委員会活動で目指すA中学校の生徒の姿」を記入した。先に記入した現状のうちの課題であるものが解消された姿や、現状より向上した姿を想定して記入した。

図8 執行部が「成長モデル」に記入する様子



また、この部分の記入に際しては、モデルの右上に位置付けられている学校教育目標や生徒会年間活動スローガン等の上位目標を踏まえながら記入するよう促した。

③その後、この「現状」と「目指す姿」のギャップを埋めるための活動を、既存の活動に縛られないように「ゼロベース」を合言葉に、「テーマ活動」と「常時活動」に整理しながら記入した。従来実施していた活動を行うこともできるものとし、その際には、必ず、「目指す姿」達成に向かう手立てになり得るか、周囲と吟味する過程を踏むよう促した。

他にも、1つの委員会ではできることが限られるため、より目的に向かうために2つ以上の委員会での「コラボ企画」もモデル内に位置づけ、協働が進むことを狙った。

春季休業中に、専門委員長によって記入された各専門委員会の「成長モデル」は、4月16日の専門委員会の時間に、提案され、必要に応じて修正された。この専門委員会の時間には、各クラスから選ばれた委員が全員参加しており、設定した「現状」と「目指す姿」のマネジメントラインや、そのギャップを埋めるため設定された活動が適正かどうかを吟味する場とした。

各専門委員会の時間に修正されたモデルは、生徒総会の第3号議案として提案された。昨年度まで議案書は紙ベースで6人班に1冊配られていたが、今回から1人1台配置されたタブレット上で全校生徒に配布され、会員である生徒一人一人が議案書を詳細に見ることができるようになった。

5月10日第5校時に行われた学級会で、続いて5月30日第5・6校時に行われた生徒総会で審議され、加筆修正が加わり、第3号議案が可決された。(各委員会が作成した「成長モデル」は、巻末に補足資料として掲載)

以降、このモデルが生徒会年間活動計画として機能し、モデルに沿った活動が実施されていった。年度の途中で、状況の変化等が発生した場合には、委員長が各専門委員会の顧問と打ち合わせをしながら活動が修正された。

#### 4-3 目的で貫くことで現れた新規の活動

12月の新執行部発足以来、停滞気味であった生徒会活動が、目的で貫くことを目指した生徒会リーダー研修を行って以降、一気に加速していった。

本稿では、報告者が活動に関わり、活動の目的で貫く指導を行った活動を中心に述べる。

##### 4-3-1 目指す学校の姿・生徒の姿の策定に向けた現状の分析

3月12日、役員は「生徒モニター（全校生徒対象のアンケート）」を実施し、現状の分析を行った。（図9）

全校アンケートの結果に10月の生徒会役員選挙で自らが掲げた公約を合わせて整理・分析をしながら、全体版「成長モデル」を作成した。その後、次年度の年間活動スローガン「革新」を決定、職員会議に提案し、承認を得た。

選挙で当選後、役員となった生徒たちは、何から始めてよいかわからない状況が見られた。目的で貫く生徒会リーダー研修を経たことで、まず実態の分析や自分たちの目指す姿の策定から始めることに思い至ったと考える。また、前年度までは、役員だけで策定していたスローガンや年間活動計画だったが、活動の本来の目的に立ち返り、生徒会活動を全校生徒のものにすべく、全校アンケートを実施し、その後自分たちが選挙で掲げた公約を加えていった。

図9 生徒会役員による現状の分析の様子



##### 4-3-2 全校集会での方針説明と発信活動の開始

生徒会年間活動スローガンを策定し、職員会議で承認されたのち、引き続き職員会議に対して生徒集会の開催を要請した。前年度までは、新年度4月の対面式で突然、年間活動スローガンが役員によって発表されるだけだった。

今回は、3月末に臨時の生徒集会を開催し、今後の生徒会の活動の方針として、初めて役員が「私たちが目指す生徒会活動」と「そもそも生徒会活動で何をするのか」を全校に

伝え、次年度の生徒会年間活動スローガンを発表した。(図 10)

この集会から、生徒用の一人一台端末をスクリーンに投影し、生徒が操作をしながら発表する形式を始めた。全校生徒で意識を共有することができるように伝えることを集会の目的として確認したためである。

これ以降、生徒会誌の発行と、A中学校ホームページでの情報発信も開始された。

役員たちは、スローガンの策定と方針の発表という自分たちが思い描いたことを、生徒会規約に則って実現していくプロセスを初めて体験することができた。また、全校生徒で生徒会活動を進めるという「成長モデル」に位置付けた「目指す姿」を実現する目的のために、積極的な情報発信が行われるようになった。

**図 10 生徒集会でスローガンを発表し、活動の方針を伝える様子**



#### **4-3-3 形骸化していた挨拶運動の見直し**

令和元年から生徒会役員が輪番制で、毎朝 7:30 から 8:00 に行っていた正門での挨拶運動を廃止した。役員は、廃止の理由を全校生徒や職員に以下のように説明した。

これまで執行部は、毎日遅刻者への声掛けや生徒の挨拶を促すことを目的に挨拶運動を実施していました。しかし、以下の理由から当日をもって運動を廃止することとなりました。

- ・執行部の負担軽減のため
- ・遅刻者の減少、生徒の自発的な挨拶につながっていない

今後は別の方法で大津中の課題にアプローチし、より意味のある活動を行っていきたいと思っています。これまで、我々の挨拶に返してくれていた生徒の皆さん、本当にありがとうございました。これからも廃止すべきものや新たに加えるべきものなど、正しい判断をしながら活動を行っていきます。

全校の挨拶の状況の向上につながっていなかった挨拶運動を廃止することを、生徒自身が決定した。前例踏襲した活動の形骸化を指摘して廃止を決定することで、自分たちの自治的な活動は自分たちで取捨選択していく、目的への立ち返りであると捉える。

廃止の背景として他に、役員の人々の公約に「多文化共生の観点から様々な言語で挨拶をする日を設ける」というものがあり、この活動への転換を意図して、従来の活動を見直すことになった。しかし、任期中に実現することはなく、朝の活動は実質休止状態が続いている。

#### 4-3-4 対面式での委員会紹介の改善

4月10日に行われた新入生との対面式で、今年度の11の委員会の活動紹介を専門委員長が行った。A中学校では、この活動紹介後の学級活動で、各学級の役割決め（委員会決め）が行われる。

昨年度までは、委員長から例年通りの常時活動とテーマ活動が紹介されるのみだった。今年度は、どの委員長も、「この委員会のそもそもの活動の目的」、「この委員会活動で解決したい学校生活上の課題と解決のプロセス」、「こんな人に、この委員会に加入してほしい」の3点を一連のストーリーとして語った。いくつかの委員会ではクイズ形式やミニワークを取り入れる等の工夫がされていた。

役員のみならず、委員長たちにも、目的で貫く意識が醸成されつつあるのだと捉えた。また、全校で生徒会活動を盛り上げたいという意欲が感じられた。

#### 4-3-5 体育大会結団式での目的の説明

5月2日に行われた体育大会の結団式では、まずH校長と体育委員長から談話が行われた。その際に、両者から共通して体育大会のそもそもの目的が語られた。談話の内容（抜粋）を以下に示す。

##### 校長先生の話

「体育大会の目的と目標について考えてほしいと思います。団での優勝、学級での優勝を目標にして頑張る。いいと思います。でもそれは『目的』でしょうか。体育大会を通して、全校が一体感を感じられること、お互いに支え合う関係がたくさんできること、これが体育大会の『目的』だと思います。」

##### 体育委員長の話

「みなさんもこの体育大会を楽しみにしていると思います。ですが、ただ楽しむだけではいけません。団リーダーや団長だけに盛り上げることを任せっぱなしにしたりすることは体育大会を行う意味がありません。みんなで一丸となって行うことに、この体育大会の意味があります。」

いずれの談話でも、ただ行事を行うのではなく、目的を意義に立ち返ることが語られており、目的で貫く活動が浸透しつつあることが分かる。教師と生徒がともに同じことを語ったことで、活動の目的を共有する機会にもなった。

#### 4-3-6 体育大会における種目新設と「一委員会一役」運動

新型コロナウイルス感染症の流行以降、主に走競技中心だった体育大会の種目であったが、前年まで行っていた技巧走を、新種目である団対抗綱引きに変更した。

先述の結団式で体育委員長が述べた通り、体育大会の目的は「みんなで一丸となること」であると執行部の会議で確認された。走競技中心の種目では、個人の能力が発揮されることが中心となっている現状を踏まえ、目的に向かうためには、一丸となって協力する価値が感じられる種目の新設が必要であると話し合われ、実現に至った。

また、従来、体育委員会や放送委員会等の一部の委員会が、当番活動を担っていた体育大会で、各委員会が委員会の活動の趣旨に合わせて1つずつ役割を創出した（図11）。

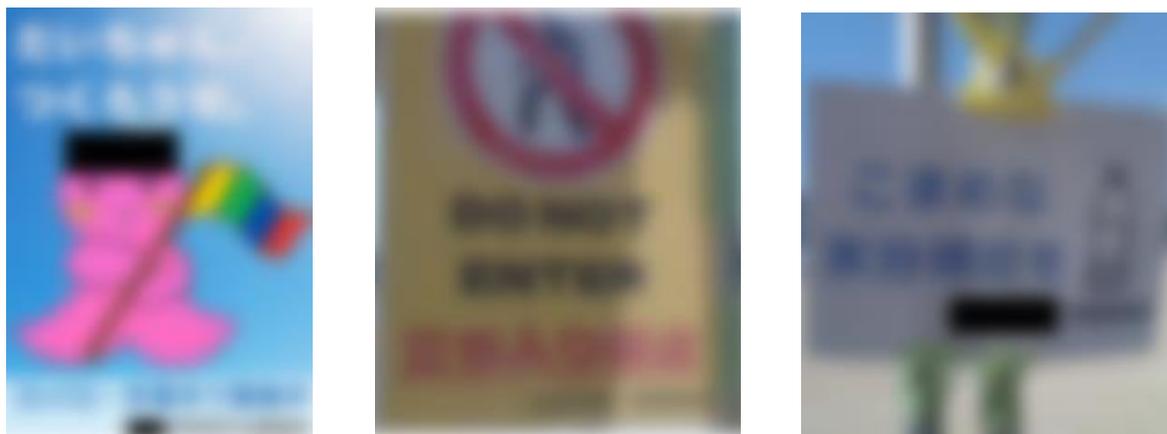
特に文化委員会では、体育大会に向けた生徒会マスコットキャラクターのイラストコンテストを開催した。ここでも体育大会の目的である「みんなで一丸となること」を実現するためには、「運動が苦手な人も、文化的活動なら体育大会で活躍できる場となるのではないか」という議論が行われ、生徒会マスコットキャラクターを体育大会仕様アレンジするイラストコンテストが実施された。

この「一委員会一役運動」を実施した意図について、体育委員長からは「これまでの体育大会は、3年生しか楽しめていなかった。なんで体育大会をやるんだって目的がわからないと楽しめないし、委員会それぞれが新しい役割を持つことで、全校生徒が体育大会をつくっている側になることで、1・2年生ももっと楽しめるんじゃないかと思った」と聞かれた。

体育大会の目的を共有したことによって、生徒は全校が一丸となるためには、競技に参加するだけでは不足だと感じ、目的のために全校で役割を創出することで参画できるようにしようとする意識が芽生えたことがうかがえる。

特に文化委員の活動では、運動の苦手な生徒でも参画できる場をつくる意図があった。

図11 体育大会における一委員会一役運動の様子



#### 4—3—7 生徒会規約の改廃と生徒議会の再開

5月30日に行われた生徒総会では、生徒会規約の改正が行われた。第1号議案で生徒会規約の改廃が審議され、毎年校則を見直すことを活動に位置付ける校則の見直し条項の新設と、従来の会計職を廃止して、生徒会活動の情報共有を一層進めるための新役職：広報の設置が行われた。

それまで校則を見直そうにも、見直しのプロセスがどこにも明文化されていなかったため、生徒は動きようがなく、一向に進まない状況だった。見直し条項の設置によって、校則を変えるという自治的な活動を行う筋道が明らかになった。

広報職が設置されたことについては、全校で生徒会活動を推し進めるための情報共有を担うために、現状を分析して必要な役職であるという意見が大半であった。生徒会費を、生徒一人当たり年間200円徴収しているA中学校では、生徒会活動のために年間9万円ほど生徒会予算があった。そのため、報告者や担当教師Gは会計職を存続させることを勧めたが、執行部は各委員会に割り当てられる予算の執行が滞りがちであることを理由に、「より必要が高まっている役割を設けたほうが良い」と主張し、生徒総会でもそのように議決が行われた。役職がなくなったことで、予算の執行は、各専門委員会の担当教師に任されてしまっており、今後の課題である。

合わせて、前年度まで開催が休止していた生徒議会を、学級委員会と連携して再開させた。

生徒議会には、各クラスから選出された学級委員2名が参加し、議事と議決が行われる。執行部や学級会が出た意見を、全校で審議する場が設けられたことで、一層生徒会活動が進む基盤ができたといえる。

## 5. 実践研究の成果と考察

前章で述べた通り、生徒会活動を目的で貫くことで、生徒会執行部を中心に生徒が主体的に活動を行う様子が見られた。

本章では、目的で貫く活動を行うことで、10 か月間に現れた成果と、その背景について考察する。

### 5-1 社会参画意識の醸成

研究の前後で、生徒を対象にした質問紙調査を実施した。結果は以下の表2のとおりである。1回目の調査は、令和5年12月7日～22日にGoogleフォームで回答してもらい、対象を令和5年度の1・2年生全員とした。(回答数262)

2回目の調査は、令和6年12月18日～令和7年1月14日とし、同じくGoogleフォームで回答してもらい、対象を令和6年度の2・3年生全員とした。(回答数206)

生徒が主体的に活動する日々の様子は見られていたが、生徒を対象にした質問紙調査では、前年度からの変化は見られず、社会参画意識を育むことができたとは言えなかった。

**表3 生徒を対象にした質問紙調査の結果**

(4件式で、1：よくあてはまる 2：あてはまる 3：あまり当てはまらない 4：あてはまらない)

質問項目	調査1				調査2			
	1	2	3	4	1	2	3	4
あなたは、4月から今まで、生徒会活動に熱心に取り組んでいますか。	38.9	48.1	11.5	1.5	31.6	57.8	9.7	0.9
あなたは、今年度の生徒会年間活動スローガンを意識して生徒会活動をしていますか。	26.0	53.8	17.6	2.6	20.9	59.7	15.0	4.4
あなたは、生徒会活動を通して、学校を変えられると思いますか。	37.0	50.4	10.3	2.3	39.8	46.1	10.7	3.4
私たちの学校は、私たちでつくっていると感じていますか。	36.9	49.4	12.5	1.2	33.0	51.5	12.6	2.9

肯定的な回答(1もしくは2と答えた)をした生徒の割合はほとんど変わっていないが、3つの質問項目で、「1：よくあてはまる」と回答した割合が、「2：あてはまる」と回答した割合へ移動していると考察する。

背景の1つ目として、10 か月間、目的を貫く活動で生徒会活動の見直しを進めたことで、生徒は活動前と比べて、より生徒会活動に取り組む自らの姿を振り返る機会が増加し、自己評価が厳しくなったのではないかと予測する。

背景の2つ目として、活動してもすぐには学校が変わらない、学校をつくっているとまでは言えない、という感覚を生徒が持ったのではないかと考える。特に、本研究では対象としなかったが、期間を通じて、生徒会役員が校則改正に取り組み続けた。生徒総会で校則の改正条項を新設し、毎月の生徒議会で審議を継続したのも、結果として、生徒の多くが求める髪型や靴下の色等について変更がなされることはなく役員は任期を終えた。最大の関心事が変わらなかったという印象の作用が大きかったと考えた。

背景の3つ目として、教師からの価値づけが進まなかったのではないかと考えた。

令和6年12月18日～令和7年1月14日に、教職員向けの質問紙調査を実施した。Googleフォームで回答してもらい、対象を令和5年度にも在籍していた教職員とした。設問3「今年度、0 中学校の生徒会活動は、どんな状況だと思われますか。」に対して自由記述があったものは以下の通りである。

- ・委員長が頑張っているのはわかるが、空回りしていることもあった
- ・前年度末から4月にかけて担当と委員長と一緒に考えた年間計画の活動が突然なくなったり、急に思いつきで活動を行ったりすることが多かった。
- ・四役や執行部は考え、工夫しながら取り組んでいるが、その他の生徒は言われたことをただやっているような印象を受ける
- ・昨年になかった新しいことを企画、実行できたと思います。クオリティについては不十分なところが多いです。
- ・執行部を中心に学校に新しい風を吹き込もうと活動する姿が見られた。また、作成した成長モデルに沿った活動がなされていた。
- ・委員会の目的を生徒が分かっていない
- ・生徒が自分たちで運営していると思います。主担当が状況に応じてアドバイスをしています。

回答を分析すると、昨年度のような形骸化や前例踏襲などのキーワードが消えた一方で、活動が改善しているにも関わらず、生徒会活動に自治的な様子が戻りつつあることに対して、成果を認めつつも生徒に対しての厳しい評価が多い。状況が改善するに連れて、求める活動のハードルが高くなったと考える。そのことで、生徒会活動に関する生徒の変容への肯定的な価値づけがあまり進まず、生徒の意識が醸成されなかったのではないかと考えた。

## 5-2 生徒による目的の再生産

続いて、自治的能力の変化について考察する。質問紙調査で、社会参画意識には変化が見られなかったものの、目的で貫く生徒会リーダー研修を行った後、停滞気味だった活動が一気に加速した。活動の目的を生徒自身が見出したことで、主体的になったからだと思

えた。

まず、目的で貫く生徒会リーダー研修の感想を、参加者のうち生徒会長である生徒が、3月11日に以下のように綴って学校ホームページに公開したものを示す。

生徒会活動とは、「生徒一人ひとりが学校における生活の充実・発展や学校生活の改善向上を目指す、生徒の自発的、自治的活動」のことです。その取組にどんな意図があるのか、また設定している目標に向けてどんな取り組みをしていくのか考えていく必要があると感じました。

いつまでも先輩方の後ろをついていくだけではなく、自分たちが前に立って学校を引っ張っていこうと参加した執行部全員が決意しました。問題を見つけ、解決方法を考え実践し、振り返るというサイクルを繰り返してより良い学校を築き上げていきます。

これからも生徒全員が生徒会としての自覚を持ってより良い学校を目指して活動に努めていきます。その中でも我々生徒会執行部がリーダーとしての意識を持って目標達成に向けて前に進んでいきたいと思えます。(下線は報告者による)

生徒会活動とは何か、学校生活の改善と向上のための課題解決サイクルを回す自治的な活動であることが、確かに述べられている。「いつまでも先輩方の後ろをついていくだけではなく」という記述からは、前例踏襲がしがらみとなって活動が妨げていた状況から、リーダー研修によって目的が確認されたため、新たな活動を行う後押しになったと捉えた。

活動の目的が喪失していたり、「伝統を受け継ぐこと」等の他者から目的を与えられたりしていた状況から、生徒自身が生徒会活動の目的や目指す姿を見出したり、自ら決定したりする、目的の再生産とでもいうべき役割を、目的で貫く活動が果たしていたと考察する。

他者から与えられるのではなく、生徒が自分たちで、形骸化していた活動の目的を再度生み出していく。その目的には納得や共感を伴うため、活動が主体的になったり、活動の中で迷った際に立ち返るのに耐えうるものになったりしたと考えた。

次に、生徒会役員選挙の立候補者の状況の変化からも、目的の再生産が活動につながっていたことを伺うことができる。

令和5年10月に行われた次期生徒会役員選挙には、1年生6名、2年生6名の計12名が立候補した。その12名のうち、「どんな学校にしたいか」という活動の目的とそれに紐づいた公約が述べられている候補者は、半数の6名であった。他の6名の候補者は、「校則を改正する」「文化祭を復活させる」「生活点検習慣をつくる」等の方法論としての公約が述べられるにとどまっていた。

本年度10月28日に実施された次期生徒会役員選挙には、1年生8名、2年生8名の計16名が立候補した。16名中15名の公約に、自らの活動によって「どんな学校にしたいか」という活動の目的とそれに紐づいた公約が明確に述べられていた。

学級で普段リーダーシップを発揮するタイプではない生徒も立候補していた。目的で貫く活動の浸透によって、候補者それぞれが「こんな学校にしたい」という生徒会活動の目的を再生産したことで立候補できたと考える。

さらに、各専門委員会では、「成長モデル」によって年間活動計画の見直しを行うことで、表4のような目的に紐づいた活動が新規に現れた。

表4 各委員会の新規の活動（「成長モデル」より抜粋し、実際行った活動を加筆）

委員会名と目的（目指す姿）	目的に向かうための新規の活動
【生活委員会】 ・周りを考え規則を守る	・身だしなみチェック （保健委員会との「コラボ企画」）
【環境委員会】 ・環境を大切にしている（節電・節水）	・校内環境検定 ・ゴミ分別方法の見直し
【保健委員会】 ・自分の健康・衛生を自分で守る ・他人の健康のために動く	・身だしなみチェック （生活委員会との「コラボ企画」） ・「A中レスキュー（時期に応じた保健情報）」を掲示からオンライン配信へ変更
【学級委員会】 ・全校生徒の仲が良い ・時間を守りメリハリがついた	・年間を通した「交流」 縦割り班でのレクリエーション （体育委員会との「コラボ企画」）
【体育委員会】 ・活気があって元気、全力で楽しむ ・運動に親しんでいる	・年間を通した「交流」 縦割り班でのレクリエーション （学級委員会との「コラボ企画」） ・体力向上コーナーの設置
【放送委員会】 ・放送を聴くのが楽しみ	・昼の放送での中国語教室 （奉仕委員会との「コラボ企画」）
【人権委員会】 ・挨拶や返事が人に言われずにできる	・欠席者への連絡など （学級のつながりを大切にする取組）
【図書委員会】 ・好きな本を見つけることができる	・十進分類法ビンゴ ・本選びチャートづくり
【文化委員会】 ・文化的活動で学校を作り出す	・マスコットイラストコンテスト ・A中「今年の漢字」コンテスト
【給食委員会】 ・給食の栄養バランスを理解	・食についてのアンケートとそれに基づく活動
【奉仕委員会】 ・（相手のために）自主的な行動ができる	・昼の放送での中国語教室 （放送委員会との「コラボ企画」） ・校内の多言語案内板の設置

以前の生徒会年間指導計画（図2）では、各委員会の年間活動目標が見直されることがほとんど行われず、過年度から引き継いだ「盛り上げる」「（ルールを）守る」等のキーワードが散見されていた。

今回、「成長モデル」を導入して、現状や目指す姿を見直すことを通して、生徒は自分たちで委員会活動の目的に立ち返ったり、再生産したりしたため、活動に対して主体性（当事者意識）が生まれ、多くの新規の活動が現れるきっかけになったのだと考察した。

生活委員会や保健委員会では、前年度まで「決まりを守らせること」に目的が向いた

「チェック活動」が主たる活動であったが、「コラボ企画」の欄を設定したことで、「自分や周りを守るため」という目的を新たに見出し、「身だしなみチェック」への活動を改めることができた。「コラボ企画」はまた、従来単独の委員会では目的の達成を成しえなかった壁を破り、学級・体育委員会の異学年「交流」の取組や、放送・奉仕委員会の多文化共生に向けた取組等、大きな目的に向かう活動を生み出した。

一方で、長年にわたって取り組んできた点検活動の中には、はっきりとした目的は見いだせないものの、廃止することによるデメリットの大きさから継続せざるを得なかった活動（生活委員会の「自転車チェック」や給食委員会の「食べ残しチェック」等）や行事の準備が中心となる活動（体育委員会の体育大会に関連する活動、文化委員会の合唱コンクールに関連する活動等）もあった。

先行する小松（2017）の実践研究では、他の先行実践と同様に、生徒会活動のそもそもの目的に立ち返っていないため、目標及び活動が学校行事を軸としたものになっており、生徒が計画した活動の内容も、教師が行う旧態依然の生徒指導的なものを生徒が行う様子が散見される点に課題が見られた。

今回、目的で貫く活動をはじめに位置付けたことで、生徒は、生徒会全体や各委員会活動で目指す姿に向かうという目的を見出しており、以前と同じ活動をするときや行事が中心となる活動に取り組む際も、行事の準備そのものが活動となることや生徒指導的な内容が現れることを防ぐことに繋がり、生徒の自治的な活動が展開されたと捉える。

### 5-3 生徒による自治的な活動のマネジメントを支える

目的で貫く活動は、目的の再生産以外にも、生徒による自治的な活動の運営を支える機能を果たしていたと考える。

「成長モデル」を導入したことによって、執行部の生徒たちは、学校生活の改善と向上を目的とした課題解決サイクルの運営をそれぞれの段階で行うことができた。その様子を2つ示す。

1つ目に、令和5年12月18日と19日、昼休みと放課後に執行部に個別で半構造化インタビューを行った回答を表5に示す。質問は「成長モデルを使うことによる効果や、逆に使ってみて難しいと感じたところは」である。

表5 委員長へのインタビュー結果の分類

課題解決の段階	該当する回答
問題の発見・確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員会でゴールを見通して次やる活動まで把握することができたと思った。</li> <li>・以前の一覧表のような形式よりも、現状や目指す姿そのための行う活動などが大変見やすくなった。</li> </ul>
解決方法の話し合い・決定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前年度の成果や状況を可視化することによって、続けなければならない活動と廃止して良い活動が見つかった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事の準備などを主な活動とする月もあったが、一目見て、この委員会で目指す姿がパッと分かったことで、どんな行事にするのか深く考えることができた。</li> </ul>
決めたことの実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月見直して何をすればいいのか、何が出来ていないのか把握できた。すべては思い通りには進まなかったけれど、優先順位を決めたりして進めるのに役立った</li> <li>・困ったときに、委員会で決めた最初の考えや活動のゴールを見直すことで、原点に立ち帰る利点と効果がある。</li> <li>・「成長モデル」を使うことによって、課題や今のくらいの達成状況の段階にいるのかが分かりやすくなった。</li> </ul>
振り返り 次の問題解決へ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月々の委員会活動の時に見返すことで、ゴールに向けて自分たちが成長していることを実感することができた。</li> <li>・それまでの活動の振り返りなどもできるので、どこをどう変えるのかということイメージしやすかった。</li> </ul>

委員長へのインタビューから、「成長モデル」は、教員の手厚い関与（ともすれば教師主導の指導）を要さずとも、委員長たちが問題解決サイクルのそれぞれの段階が運営できるように支援する機能を果たしていたことが確認できた。

一方で、「成長モデル」を使う難しさについては、以下のような回答が聞かれた。

- ・テーマ活動を設定したので、その月その月にやらなければいけないことが決まってしまう、突発的に発生する活動がしにくかった。

- ・活動の見通しを持つことができたのは良かったけれど、一年後の姿は先のことすぎて予測が難しいと感じた。

（報告者の、どうすれば難しくなくなると思いますか、という追加の質問に対して）

もっと別の場面でも、一年後とかその先の姿をイメージするという活動の機会があれば、考えやすくなると思う。

- ・目標を立てるのはいいけれど達成できないものもあり、一年以上かけて継続して取り組まなければいけないものもあることがわかった。

- ・「成長モデル」を、私たち委員長がどこまで原案を作るかというところは、考える必要があると思います。4月に委員会で提案した時に、なかなか意見が出なかった。あまり意見が出なかったので、自分一人で作ってしまった感じがあった。かといって、4月に委員会のメンバーの声を生かしてゼロから作り始めると、時間が足りないと思う。もっとたくさんの人に作戦に加わってもらうにはどうすればいいか考えるべきだ。

今後の課題としては、年度途中でモデルの修正を、生徒議会を通すことで柔軟にする

こと、「成長モデル」を継続的に運用することで見通しを持つことや活動の設定をしやすくすること、モデル作成の時期や方法を見直すこと等、より自治的な活動を運営しやすくすることが挙げられる。

2つ目に、現れた活動のうち、「体育大会における新種目設立（図 12）」と「体育大会一委員会一役運動（図 13）」、「挨拶運動の廃止（図 14）」について、実践までのプロセスをチャート化したものを示す。チャート化に際しては、それぞれ体育委員長・生徒会役員（4名）・文化委員長に、インタビューを行った。「どのようなプロセスで実現に至りましたか」という質問に対する一連の回答を、報告者が要素として整理した。

いずれの活動でも、生徒たちが目的を確認したり設定したりして、迷ったら目的に立ち返るという過程を踏み、次の段階に進むことができていたことが分かる。

また、目的の設定と立ち返りを行うようになったことが、議論の基盤を確かなものとし、生徒の自信につながり、生徒の主体的な活動につながっている。

さらに、図 12 では、考えていた種目の企画が廃案になるという段階（黄の網掛け）、図 14 では、生徒による廃止の決定に対して、職員から「続けてほしい」という要望が来る段階（黄の網掛け）が現れたものの、目的を確かにしているからこそ、生徒が大人（教員）との議論にも、十分耐えうるような意見を持ち得ていることが分かる。これは、生徒が学校づくりの主体として立ち現れ始めている様子だと捉えた。

図 12 体育大会における新種目設立までのプロセスのチャート

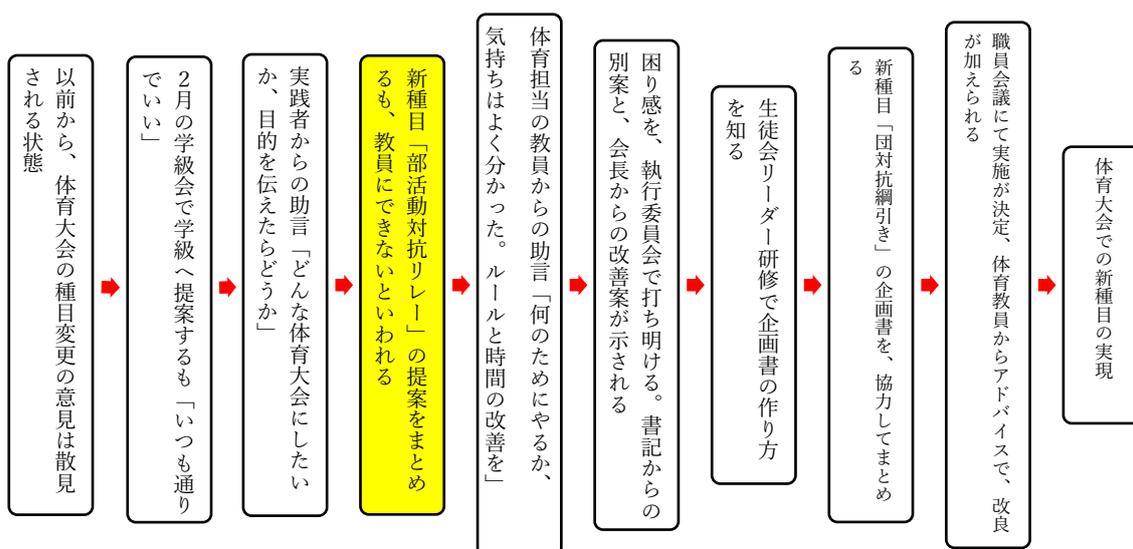


図 13 体育大会一委員会一役運動（文化委員会）までのプロセスのチャート

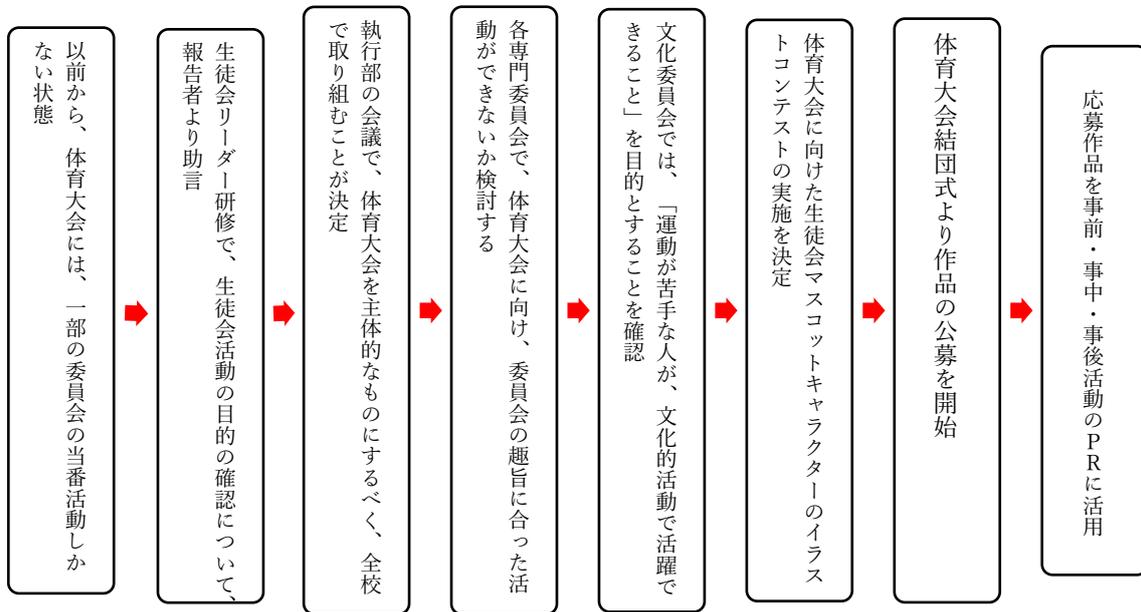
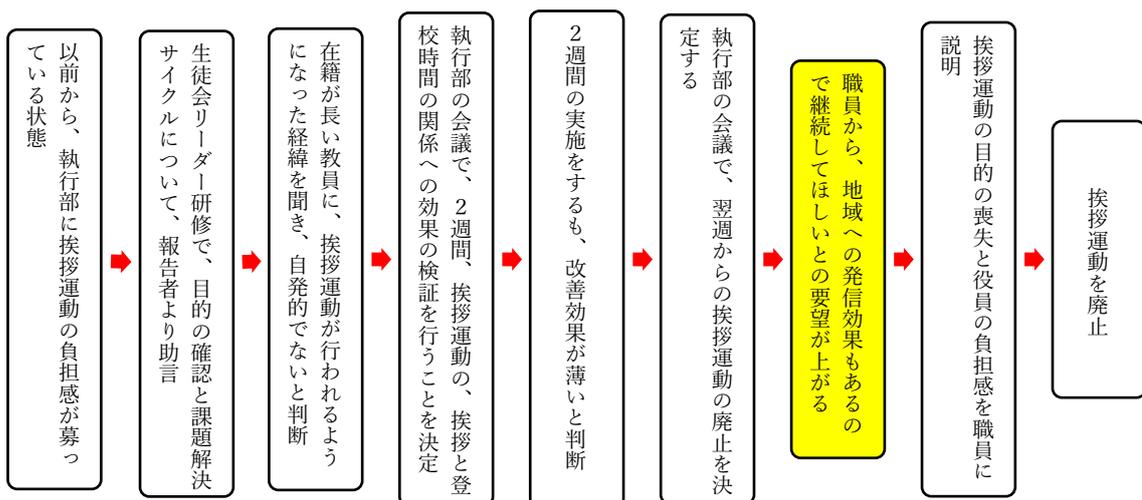


図 14 形骸化した挨拶運動の見直しまでのプロセスのチャート



3つ目に、4月10日に実施された対面式で委員会紹介が行われた後に行った、生徒及び教師へのインタビュー結果を以下に示す。

(インタビューの対象者は、報告者による無作為抽出。半構造化インタビューとし、「先ほどの委員会紹介はどうでしたか」と質問)

・1年生(男子生徒)

小学校の時は、委員会で決まっている活動をやっていたけれど、課題を解決するために毎年新しいことを考えてしているのはすごいと思った。

・3年生(女子生徒・役員ではない)

自分たちの1・2年生の時の委員会紹介はまったく覚えていないけれど、今年のは、何がしたいかストーリーがあったので、印象に残った。

(報告者の「ストーリー」とは、という追加の問いかけに対し)

ストーリーっていうのは、今、大津中の何が課題であって、その解決のために、この委員会で、まずこれをして、次にこれをして……。最初に目指したい姿、こうなりたい、の話から始まっているのとか、イメージしやすい写真もあってよかった。どの委員会に入りたい、とか、やりたい気持ちになった。

・教員1

いい委員会紹介。最近、3年生の面接指導とかしていても、「委員長として、自分が何を目指して、何をしてきたか」が語れないリーダーたちがたくさんいる。こうして、少しずつでもいいから、自分の言葉でリーダーが語る事が大事。これが、「自立」とか「創造」につながるし、全校で目指す方向じゃないの。

執行部以外の生徒や教員にも、生徒が自ら自治的な活動を運営することが伝わり、浸透していく様子が伺える。

このように、目的を貫くことによる、目的の再生産と「成長モデル」による運営の支持によって、生徒は自治的な活動を行うことができていると言える。

#### 5-4 教職員への波及効果

生徒による主体的な生徒会活動は、教職員へも波及効果をもたらしていたことを示す。

4月10日に実施された対面式で、各委員長から作成中の「成長モデル」をもとにした委員会紹介が行われた後、職員室で教師へ行ったインタビューの結果を以下に示す。(対象者は報告者による無作為抽出。半構造化インタビューとし、「先ほどの委員会紹介はどうでしたか」と質問した)

## 教員 2

文化委員の「だいちゅんフォトコンテスト」とか「オリジナルだいちゅんデザインコンテスト」とかは良い。体育大会などでは活躍できない人にスポットが当たる。アクリルスタンドのだいちゅんを作って、いろんなところを背景に写真を撮ると面白そう。そんな創造的なことに予算を使ってほしい。

(報告者の「なぜそのような発想が出てきましたか」という追加の質問に対し)

生徒が変わろうとしている。私たちも一緒に「面白がってやる、一緒になって喜ぶ」って、大事なことだと思うんです。

この教師の発言は、生徒の変化を感じ取ったことで、教師自身からも生徒会活動に対する新しいアイデアが導き出されているケースだと考える。

## 教員 3

自分たちが変えたいから変えるんじゃないんですよ。僕は、靴下について、変えようが変えまいが、どちらでも構わない。ただ、去年みたいに、はい、制服の移行期間をなくしました。自分で判断して、ということになっている。でも全校の一人一人の意識が、変わっていないから、式典に上着を忘れる者がいる。一人一人が考える議論にならないと、結局僕が「式典は上着ありで」ということになる。あるいは、変えても、変わったのは「守らせる主体」が生徒指導から、生徒会に変わっただけ。生徒が生徒を取り締まることになるだけじゃないか。

この教師の発言は一見、生徒が提案した校則の改正に対してブレーキをかけているように見えるが、現状の校則改正の議論に対して具体的な改善点を挙げており、生徒指導的な生徒会活動を見直す視点がもたらされていることがわかる。

また、令和6年12月18日～令和7年1月14日に、教職員向けの質問紙調査を実施した。Google フォームで回答してもらい、対象を令和5年度にも在籍していた職員とした。設問6「今年度、生徒会活動の指導をされていて、こんな改善ができるのではないかと考えられていることがあれば教えてください」に対して自由記述があったものを、前年度と今年度の比較したものが以下の通りである。(表6)

表6 教師向け質問紙 設問6に対する自由記述

令和5年度実施	令和6年度実施
・昨年まではコロナ禍の中、実施できないことが多くあり、今年度数年ぶりに実施ができたことは、手探りの状態だった。年度末の引き継ぎをしっかりとする必要があったと感じた。	・委員長が一生懸命考えていること(年間計画や各月の活動について)を、副委員長や担当教員と、相談・打ち合わせ等を行う場の設定。一年度末と年度初め

<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師が介入しすぎず生徒主体で動けるように、学校のことを考えるミニ会議を定期的で開催する。</li> <li>・打ち合わせや連絡事項の徹底、学年をこえた集計の分担、最終的なベルマーク点数チェックの教員負担</li> <li>・縦割りの活動ではあるけれど、各学年にもリーダーを設定し、学年でその委員会への所属意識を高めさせる。</li> <li>・教室での活動と執行部の橋渡しである生徒議会の活性化</li> <li>・文化委員会ですが、他校のように学習面も少し担えれば。また、新委員長とともに3月までに次年度の年間計画を立てて、見直しをもって生徒主体で活動できるといいと思います。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員長と担当で立てた年間計画を生徒会執行部で検討し、変更されたことを担当に伝え、見直しを持った委員会活動ができると思います。</li> <li>・委員長がやりたいことはどんどん採り入れていいと思いますが、年度当初に精選して具体的に決め、年間計画を生徒総会で質疑応答、検討などすることで全校生徒と共通理解し、活動が深まると思いました。</li> <li>・各委員会の活動内容の見直し、どの委員会が何をするのか、年度当初にしっかりと各担当の先生と委員長が打ち合わせをする。年間計画を都度都度みながら、活動を行えたらと思います。</li> <li>・人権委員会としては集会運営の質をあげたい。具体的には返しのあり方</li> </ul>
--	---

2か年の調査を比較すると、令和5年度に実施した際の回答は主に「教師がどう動くか」ということを述べているのに対し、令和6年度に実施した際の回答は、生徒の動きや生徒とともに何ができるかという回答が増加していると捉えた。

以上から、目的で貫く生徒会活動を展開したことによって、生徒から本来の自治的な活動が見られるようになったことで、生徒会活動において、教師が生徒を「共に活動を考える相手」としてとらえるようになりつつあると考えた。

また、すべての委員会で同じ様式である「成長モデル」を用いたことで、校内の共通言語として働き、生徒同士、また生徒・教師間で活発な議論を行うことができる場面が頻繁に見られるようになった。このことは、教師にとっても、生徒会活動に対して、教師主導でない、適切な指導を行うきっかけとしても働いており、指導への困難さを解消する一助としても働いていたと考える。

## 6. まとめ

### 6-1 研究のまとめ

中学校生徒会活動において、目的で貫く活動を展開したことによって、成果として、生徒会執行部の生徒を中心とした主体的な活動が見られるようになった。

一方で、様子の変化は見られるものの、生徒が学校を自らの活動によって変えることができる実感や学校をつくっている意識の醸成は見られなかった。

ただし、生徒の主体的な生徒会活動を企図するにあたって、目的を貫く活動は、生徒が自ら活動の目的を再生産することを促す役割や、生徒による自治的な活動の運営を支える役割を持つと分かった。これは、昨今の生徒会活動が抱える課題である、目的の喪失に伴う生徒の主体性の減退や活動の形骸化、点検・評価活動の自己目的化等への対策として有効である。

また、教職員への波及効果として、目的を貫く活動によって生徒は大人（教員）との議論にも十分耐えうるような意見を持ち得ており、教師は生徒会活動を通じた学校づくりとともに考える相手として認識する傾向が現れることが分かった。

### 6-2 今後の展望

以上のように、本研究の成果と課題について述べた。一方で、今回の実践はA中学校だから、G教諭やS教諭、報告者が生徒会の担当をしていたから、このような結果が見られたのではないと言われるところもある。この成果が他の中学校でも活用できるためには、学校内での生徒会活動の仕組みを構築することで、一層、生徒の主体性の向上や、学校づくりへの参画が望まれると考える。

まず、目的で貫く活動や「成長モデル」の活用を継続的に進めていくことである。今回、活動の期間が10ヶ月ということで、チャートの中にもあったような活動がうまくいく状況も、逆にうまくいかない状況もさまざまに経験してきたことだと考える。

学校現場は急速に変化して行くものではないから、継続的な取組を進め、生徒が生徒会活動を通して学校が良くなったという実感を積み重ねていくことで、一層効果を高めることができると思う。

次に、生徒会活動に対する教職員の意識を一層変えていく必要がある。生徒たちが変容していく中で、教師も触発されてともに新しいアイデアを試していく姿や、職員室で生徒会活動に関するアイデアの交換をする姿が見られるようになった。一方で、この変化にどう対応してよいかという同僚からの新たな困り感も聞かれた。

その際に、複数聞かれたのが、「生徒会活動の指導の仕方を大学の教員養成で習うわけではない」という話や「自分が中学生の時の生徒会活動ではそんなことしなかった」という話である。

先述の法整備や学習指導要領の改訂、文部科学省「生徒指導提要」の改訂に伴い、学校の中での子供の位置づけが変わった。生徒会活動の目的や意義、ひいては教育観や指導観

について校内研修等を設けることで、教職員は意識を更新することができ、この困り感を減らしていくことができ、生徒会活動において、生徒とともに学校のつくり手として関わることができる考える。

特に効果的であると考えるのが、生徒と教師がともに生徒会活動を語る場の設定である。先に示した表6の記述でも、委員長をはじめとする生徒と委員会活動について話す機会を設けたい、という意見が複数聞かれた。

生徒・教員合同の校内研修等を年度末や年度当初に設定し、ともに次年度の生徒会活動を計画することで、生徒・教師の共通した目的を見出して生徒会活動を展開できる。そのことは、生徒が生徒会活動のカリキュラムに対し意見を表明するという、学校づくりへの参画の機会にすることにもつながる。

また、「成長モデル」の効果について、12月に生徒会役員にインタビューをした際に、「もっと別の場面でも、一年後とかその先の姿をイメージするという活動の機会があれば、考えやすくなる」というものがあり、示唆を得た。生徒会活動の問題解決のサイクルは、学級活動は言うまでもなく、総合的な学習の時間の探究サイクルとも類似性が高い。また、将来の自分や集団の姿をイメージし、その実現に向けて計画を立てていくという活動は、現在キャリア教育の推進によっても図られているところである。

教育実践研究の場面において、所属校において、2年生国語の授業を担当した際、言語活動で「次年度の委員会活動を、新生徒会役員に提案しよう」と設定し、話すこと聞くことの単元を構想・実践した。その中で、2年生の生徒たちが、こちらが指導せずともスムーズに、A中学校の現状と課題から目指す姿を決め、自分たちが実行できる解決のための手立てを考え、提案にまとめる姿が見られた。目的で貫く活動が浸透していることの表れである。

学校の教育活動全体を見据え、特別活動（生徒会活動）の特質に基づいて、他の教科・領域との連携を効果的に図っていくことで、学校全体の教育活動の効果を高めることにもつながるし、特別活動（生徒会活動）の効果も、より一層高めることができる考える。

## 引用・参考文献

- ・文部科学省(2017),中学校学習指導要領(平成29年告示),東山書房
- ・文部科学省(2017),中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編,東山書房
- ・文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2023),特別活動指導資料 学校文化を創る特別活動 中学校・高等学校編,東京書籍
- ・文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2016),特別活動指導資料 学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】,東京書籍
- ・文部科学省(2023),生徒指導提要(令和4年12月),東洋館出版社
- ・太田恭司(2023),資質・能力を育成するマネジメントツールの開発,熊本大学教育実践研究 40号,pp111-119
- ・日本特別活動学会(2019),三訂 キーワードで拓く新しい特別活動 平成29年版・30年版学習指導要領対応,東洋館出版社
- ・明石要一・小川幸男(1996),生徒会活動を通じた学校活性化の方法—中学校における生徒会活動の活性化を目指して—,千葉大学教育学部研究紀要 第45巻 I:教育科学編,pp39-59
- ・佐藤吉史(2011),当たり前のことを当たり前にする生徒の育成,教育実践研究 第21集 上越教育大学学校教育センター,pp233-238
- ・小松祐貴(2017),目標と活動と評価の一体化によって全校がひとつになる生徒会活動—フアシリテーショングラフィックを活用して—,教育実践研究 第27集 上越教育大学学校教育センター,pp181-186
- ・高橋淳一(2012),ショートスパンの相互評価を生かした生徒会活動の取組について,教育実践研究 第22集(2012)上越教育大学学校教育センター
- ・堀口晃一(2006),生徒の自治力・自主性を高める生徒会活動・行事の工夫,教育実践研究 第16集 上越教育大学学校教育センター,pp137-142
- ・篠塚明彦(2020),特別活動における主権者の育成—特別活動の歴史的変遷から考える—,弘前大学教育学部紀要 第123号 pp59-68
- ・加藤一晃(2024),生徒会活動を中心とした生徒の学校参加の系譜—教育方法、権利、学校改善—,名古屋芸術大学研究紀要第45巻 pp91-107
- ・村瀬悟(2023),特別活動における生徒の「主体性」がもたらす「充実度」への影響—自己評価による振り返り活動に着目して—,椛山女学園大学教育学部紀要 16(1) pp67-76
- ・全国生活指導研究協議会常任委員会(2015),生活指導と学級集団づくり 中学校(教師のしごと),高文研
- ・日本財団(2024),第62回「国や社会に対する意識(6カ国調査)」主な結果
- ・工藤勇一・苫野一徳(2022),子どもたちに民主主義を教えよう 対立から合意を導く力を育む,あさま社

## 謝辞

熊本大学を卒業後、前任校と現任校の中学校2校で、10年間勤務させていただいてきました。自分自身が児童生徒の頃、小学校から中学校、高等学校まで生徒会活動に夢中になって取り組んできたこともあり、教職についてから生徒会活動を担当させていただくことができた2年間は、活動を通して生徒たちが成長する姿、学校が活性化する様子を間近で見せていただき、本当に嬉しかったです。

しかし、経験を積むにつれ、「本当にこの指導であっているのか」「自分が後輩の先生方に伝えられることは何だろう」という思いが募るばかりでした。また、特別活動は、学校現場で働きながら研修などの機会を得ることが、他の教科・領域より難しい状況があり、「別の環境でもう一度学び直したい」と思っていた時に、このような研修の機会を与えてくださり、熊本県教育委員会をはじめ菊池教育事務所、大津町教育委員会に深く感謝いたします。

熊本大学教職大学院では、担当の藤井美保准教授、太田恭司シニア教授をはじめ、多くの先生方から学校マネジメント、学級経営、教科教育、生徒指導や教育相談と多岐にわたり丁寧にご指導をくださり心より感謝申し上げます。

また同じ立場である熊本県・熊本市からの現職派遣教員、そしてこれからの学校現場を担う学部新卒のストレートマスターとの出会いのおかげで、自分を見つめ直すことができた充実した2年間を送ることができました。

最後に、本実践研究を行うにあたっては所属校の校長先生をはじめ、諸先生方、第108期生徒会役員の生徒たちには大変お世話になりました。この貴重な学びを今後の実践に活かしていきます。ありがとうございました。

令和7年3月

熊本県教育委員会派遣

教諭 小島 孝介



